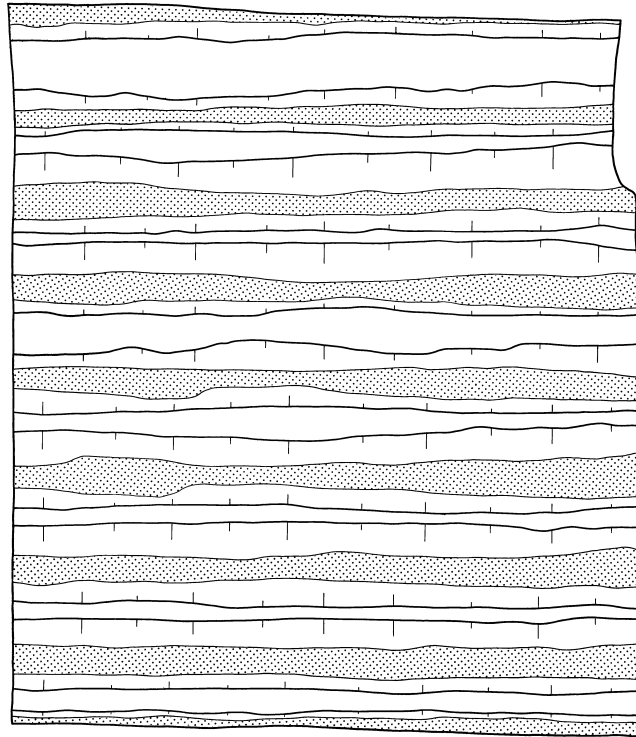


不破遺跡

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ



2004.3

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

不 破 遺 跡

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

2004.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

中村市は高知県西部に所在し、高知県第一の河川で、「最後の清流」といわれる四万十川やその支流である中筋川の下流域に位置する幡多郡の中心地です。中村市は古くから開かれた土地であり、幡多郡下で最も多くの遺跡が存在しています。この中村市域では中筋川流域を宿毛方面に向かって延びる高規格道路である中村宿毛道路建設に伴って近年多くの発掘調査が実施され、中村市の歴史が少しずつ明らかになってきました。

本書は平成14年度に発掘調査が実施された不破遺跡の報告書です。この遺跡からは近代の遺構が確認されており、戦前における中村市の歴史を後世に伝える貴重な資料を得ることができました。

このことは忘れられていく地域の歴史を再認識するものであり、地域の方々にとって身近な歴史を知る資料になると思われます。

最後に、調査にあたり多大な御理解と御協力を頂いた国土交通省中村河川国道事務所、地元関係者の方々、発掘調査に従事して下さった作業員の皆様には心より御礼申し上げます。

平成16年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 島内 靖

例 言

1. 本書は中村宿毛高規格道路建設計画に伴い平成14年度に発掘調査を実施した不破遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 不破遺跡は高知県中村市不破に所在する中世を中心とした遺跡である。本調査では近代の遺構が確認されたが、不破八幡宮の存在や確認調査における土師質土器の出土から本調査区付近には中世期に集落が形成されていたことが推察される。発掘調査延べ面積は2,646㎡であった。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 島内靖

総務：同総務課長 久川清利，同主幹 中城英人・金子晃子

調査総括：同調査課長 重森勝彦

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 中山真司，同調査員 下村裕，技術補助員 野町和人，測量補助員 松永輝明

5. 本書の執筆は廣田の指導のもと第Ⅰ～Ⅳ・Ⅶ章のうち中山が調査日誌抄，それ以外を下村，第Ⅷ章を廣田が執筆し，第Ⅵ章は大阪市立自然史博物館館長である那須孝悌氏から玉稿を頂いた。また，第Ⅴ章には株式会社古環境研究所，パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した自然科学分析結果を掲載している。編集等は第Ⅷ章を廣田，それ以外を下村が行い，現場写真は中山，下村，遺物写真は下村が撮影した。遺跡の略号は「02-5NF」とし，出土遺物の註記等にはこれを使用している。報告書に記載の縮尺率はそれぞれに示した。また，掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており，方位Nは公共座標(世界測地系)におけるGNである。
6. 遺物については，原則として縮尺1/3で掲載し，一部の遺物については縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを表示している。また，遺物番号は通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。
7. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって，下記の方々の御指導並びに貴重な御教示，御助言を賜り御協力頂いた。記して感謝の意を表したい。

那須孝悌(大阪市立自然史博物館)，川村慎也(中村市教育委員会)，(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏

8. 遺構・遺物の測量及び写真撮影は各調査員，技術補助員，測量補助員が行い，測量には新たに設置した4級基準点を使用した。
9. 発掘調査及び遺物整理，報告書作成については，下記の方々に御協力頂いた。

発掘調査

有友実，伊与木晴茂，岡崎桂子，岡本里以，岡本寿美子，岡本寅美，岡本弘美，沖和子，川村勉，高橋太郎，長崎竹美，中山昭子，布陽子，野並廬，平地五月，松本菊美，宮崎貞義，

森本勝一，山脇良幸

上記の方々には酷寒の中，労を厭わず作業に協力して頂いた。記して感謝の意を表したい。

遺物整理

松田美香，横山めぐみ，川添明美，鶴羽綾

上記の方々には整理作業を担当して頂いた。記して感謝の意を表したい。

10. 調査にあたっては，国土交通省四国地方整備局中村河川国道事務所の御協力を頂いた。また，不破区長をはじめ地元住民の方々に，遺跡に対する御理解と御協力を頂き，厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物，その他図面類の関係資料は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 序章

- 1. はじめに 1
- 2. 調査の契機と経過 2
 - (1) 契機と経過 2
 - (2) 確認調査 3
 - ① 平成13年度 3
 - ② 平成14年度 3

第II章 地理的・歴史的環境

- 1. 地理的環境 5
- 2. 歴史的環境 5

第III章 調査の経過

- 1. 調査の経過 9
- 2. 調査日誌抄(中山) 9

第IV章 調査の概要

- 1. 調査の概要 11
- 2. I区確認トレンチ 11
 - (1) 層序 11
 - (2) 堆積層出土遺物 12
- 3. II区 12
 - (1) 層序 12
 - (2) 堆積層出土遺物 14
 - (3) 遺構と遺物 15
 - ① 畝間 15
- 4. III区 21
 - (1) 層序 21
 - (2) 堆積層出土遺物 24
 - (3) 遺構と遺物 25
 - ① 畝間 25

第V章 自然科学分析

- 1. 高知県，不破遺跡における自然科学分析(株式会社 古環境研究所) 29
 - (1) はじめに 29
 - (2) 試料 29
 - (3) 花粉分析 29

① 方法	29
② 結果	30
i 分類群	30
ii 花粉群集の特徴	30
(4) プラント・オパール分析	30
① 方法	30
② 結果	31
(5) 考察	31
(6) まとめ	32
2. 不破遺跡の自然科学分析(パリノ・サーヴェイ株式会社)	34
はじめに	34
(1) 調査地点の層序	34
① 1地点	34
② 2地点	35
(2) 試料	36
(3) 分析方法	36
① 軟X線写真撮影観察	36
② 植物珪酸体分析	36
(4) 結果	37
① 軟X線写真撮影観察結果	37
② 植物珪酸体分析	37
i 1地点	37
ii 2地点	38
(5) 考察	38
① 畝状形成以前の時期	39
② 畝状遺構形成後の畝間充填の時期	39
第Ⅵ章 中村市不破遺跡の層序(大阪市立自然史博物館館長 那須孝悌)	41
第Ⅶ章 考察	
1. 畝状遺構及び畝間について	43
2. 遺物について	44
第Ⅷ章 まとめ(廣田)	
1. はじめに	45
2. 不破遺跡	45
3. 掘削時期と耕作期間	46
4. 畝状地形の成因	47
5. おわりに	47

挿図目次

Fig. 1	高知県中村市及び不破遺跡位置図	1
Fig. 2	不破遺跡位置図(S=1/100,000)	2
Fig. 3	平成13年度 試掘トレンチ位置図及び調査対象範囲図(S=1/2,000)	2
Fig. 4	平成14年度 試掘トレンチ位置図及び調査対象範囲図(S=1/2,000)	3
Fig. 5	周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)	6
Fig. 6	発掘調査風景	9
Fig. 7	空撮風景	10
Fig. 8	不破遺跡調査区全体図及び基準点配置図(S=1/2,000)	11
Fig. 9	I区確認トレンチ柱状図(S=1/20)	12
Fig.10	I区確認トレンチ出土遺物実測図(土師質土器, 土製品)	12
Fig.11	II区北壁セクション図(S=1/40)	13
Fig.12	II区第I層出土遺物実測図(土師質土器, 土製品, 近代磁器, ガラス製品)	14
Fig.13	II区遺構平面図(S=1/250)	16
Fig.14	II区畝間エレベーション図(S=1/100)	17
Fig.15	畝間9	18
Fig.16	畝間10・11	18
Fig.17	畝間12・13	19
Fig.18	II区畝間出土遺物実測図(近世磁器, 近代陶磁器, 木製品)	20
Fig.19	III区北壁セクション図1(S=1/40)	22
Fig.20	III区北壁セクション図2(S=1/40)	23
Fig.21	III区第I層出土遺物実測図(近世陶器, 近代磁器)	24
Fig.22	III区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師器)	25
Fig.23	III区遺構平面図(S=1/250)	26
Fig.24	III区畝間エレベーション図(S=1/100)	27
Fig.25	III区畝間出土遺物実測図(近世磁器, 近代磁器, 土製品)	27
Fig.26	不破遺跡におけるプラント・オパール分析結果	32
Fig.27	調査地点の層序および試料採取位置	35
Fig.28	植物珪酸体含量	38
Fig.29	渡川改修工事昭和12年度竣工図(『渡川改修四十年史』1970より)	46
Fig.30	ラダエキスカベーター(『渡川改修四十年史』1970より)	47

表目次

Tab.1	周辺の遺跡一覧	6
Tab.2	高知県, 不破遺跡のプラント・オパール分析結果	32
Tab.3	不破遺跡における花粉分析結果	33
Tab.4	植物珪酸体分析結果(個数)	36
Tab.5	植物珪酸体含量(個数/g)	37

図版目次

PL. 1	調査前風景(西より) 調査前風景(東より)	PL.14	Ⅲ区北壁セクション3(南東より) Ⅲ区北壁セクション4(南東より)
PL. 2	I区確認トレンチ完掘状態(南より) I区確認トレンチ北壁セクション(南より)	PL.15	Ⅲ区北壁セクション5(南東より) Ⅲ区畝間5(南東より)
PL. 3	Ⅱ区畝状遺構検出状態(南東より) Ⅱ区遺構完掘状態(南東より)	PL.16	Ⅲ区畝間6(南東より) Ⅲ区畝間2土製品(23)出土状態(東より)
PL. 4	Ⅱ区遺構完掘状態(南東上空より) Ⅱ区遺構完掘状態(北東上空より)	PL.17	土師質土器(羽釜) 土師質土器(羽釜)
PL. 5	Ⅱ区北壁セクション1(南より) Ⅱ区北壁セクション2(南より)	PL.18	土製品(土錘) ガラス製品(小瓶)
PL. 6	Ⅱ区北壁セクション3(南より) Ⅱ区北壁セクション4(南より)	PL.19	木製品(下駄)表 木製品(下駄)裏
PL. 7	Ⅱ区北壁セクション5(南より) Ⅱ区北壁セクション6(南より)	PL.20	近代陶器(蓋) 土師器(杯蓋)
PL. 8	Ⅱ区北壁セクション7(南より) Ⅱ区畝間11近代陶器(8)出土状態(西より)	PL.21	近世磁器(紅皿) 土製品(土錘)
PL. 9	Ⅲ区畝状遺構検出状態(北西より) Ⅲ区畝状遺構検出状態(北東より)	PL.22	近代磁器(碗) 近代磁器(碗)底部
PL.10	Ⅲ区第1次耕作面完掘状態(北西より) Ⅲ区第1次耕作面完掘状態(北西上空より)	PL.23	不破遺跡の花粉・胞子
PL.11	Ⅲ区第2次耕作面完掘状態(北西より) Ⅲ区第2次耕作面完掘状態(北西上空より)	PL.24	プラント・オパールの顕微鏡写真
PL.12	Ⅲ区第3次耕作面完掘状態(北西より) Ⅲ区第3次耕作面完掘状態(南東上空より)	PL.25	植物珪酸体
PL.13	Ⅲ区北壁セクション1(南東より) Ⅲ区北壁セクション2(南東より)	PL.26	軟X線写真(1)
		PL.27	軟X線写真(2)
		PL.28	軟X線写真(3)
		PL.29	軟X線写真(4)

第 I 章 序 章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から業務委託を受けた中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成14年度に実施した不破遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。具同中山遺跡群を始めとする一連の発掘調査は国土交通省四国地方整備局中村河川国道事務所が実施している中村宿毛道路建設工事に伴い、工事区域内に所在する遺跡の中で、工事によって影響を受ける部分について事前の発掘調査及び出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

中村宿毛高規格道路は高知西南中核工業団地等の開発に伴って予想される交通需要の増加に対応するための自動車専用道路として中村・宿毛間で建設が進められている。中村宿毛道路の計画路線内に該当する具同地区を始めとする中筋川流域は遺跡の分布密度が高い地域として周知されており、国土交通省四国地方整備局中村河川国道事務所と高知県教育委員会の協議の結果、計画路線内に存在する埋蔵文化財包含地について、平成3年度から(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが試掘調査を実施し、その結果に基づき発掘調査を実施してきた。

中村宿毛道路に伴う一連の工事によって発掘調査が実施された遺跡は平成14年度調査の不破遺跡を含め13遺跡を数え、縄文時代から中世までの遺構・遺物が確認されている。昨年度発掘調査が実施された不破遺跡は四万十川左岸の低位河岸段丘上に立地する中世を中心とした遺跡である

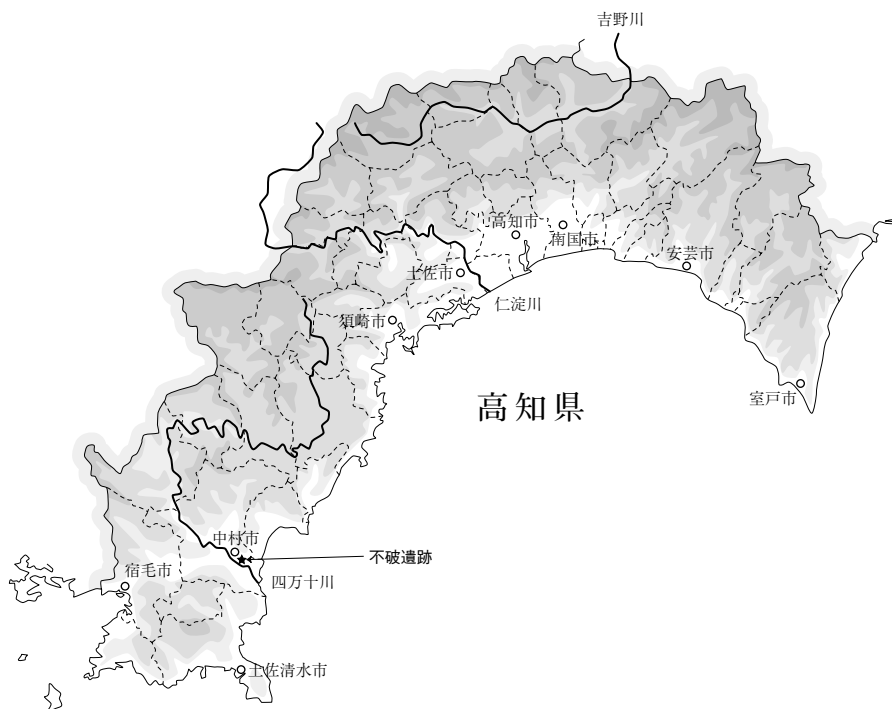


Fig.1 高知県中村市及び不破遺跡位置図

が、本調査で確認されたものは四万十川の流に沿った畝間である。これらの畝間は昭和8年以降、対岸にある中筋川の流を変えるための背割堤防や中村市入田の堤防を築くためにエキスカベーターと呼ばれた機械で掘削した際に生じた畝状遺構の間で確認された。本調査区の東

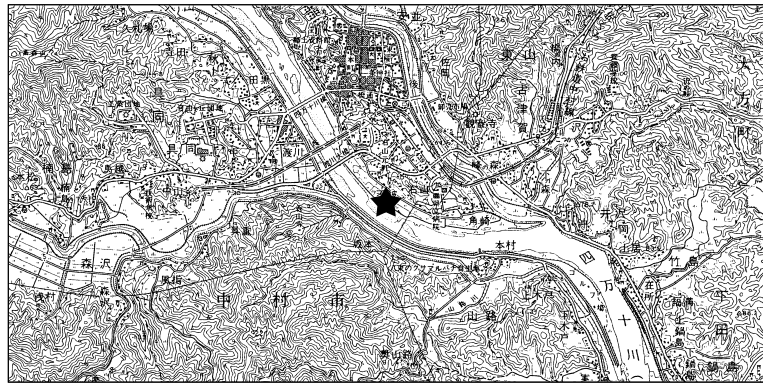


Fig.2 不破遺跡位置図(S=1/100,000)

側で行った試掘調査では、土師質土器が出土しており、不破八幡宮の存在からみても、本遺跡周辺には中世に集落が形成されていたことが推察されるが、中世の遺構は掘削工事によって大半が破壊されたものと考えられる。

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

中村宿毛道路における発掘調査は平成3年度から行われているが、平成13年度には四万十川以西については一応発掘調査の終了をみた。平成14年度には引き続き四万十川以東の工事が行われる



Fig.3 平成13年度 試掘トレンチ位置図及び調査対象範囲図(S=1/2,000)

こととなり、当該箇所の確認調査を行う必要が生じた。確認調査は平成13年度に県道山路中村線より河川側を行い、平成14年度には県道山路中村線より丘陵側の確認調査を行った。その結果、県道より河川側では四万十川に平行して延びる畝間を確認し、平成14年度に本発掘調査を実施することとなった。

(2) 確認調査

① 平成13年度

県道山路中村線より河川側の確認調査は平成13年12月10日から12月19日に行った。設定した6カ所のトレンチでは明確な遺物包含層は確認されなかったが、調査対象地を南北に並走する畝間をTR-1・4・5で確認した。

② 平成14年度

県道山路中村線より丘陵側の確認調査は平成14年1月31日から2月5日に行った。設定したトレン



Fig.4 平成14年度 試掘トレンチ位置図及び調査対象範囲図(S=1/2,000)

チは7ヵ所であるが、全てのトレンチで遺構・遺物包含層とも確認されなかった。調査対象地中央は堆積状況から低湿地であったと考えられ、TR-4からは近世・近代の陶磁器片、TR-5からは土師質土器片が出土しているが、流れ込みと考えられる。民家跡についても近代の整地層は確認されたが、近世以前の遺物包含層・遺構とも確認されなかった。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

不破遺跡が所在する中村市は北緯32度59分，東経132度56分，高知県の南西部に位置し，東西約29km，南北約28km，面積384.6km²，人口約35,000人で，北は幡多郡大正町，十和村，西土佐村，南は幡多郡三原村，土佐清水市，東は幡多郡大方町，西は宿毛市に接している。中村市は高知県と愛媛県との県境にそびえる鳥形山(1,459m)と不入山(1,336m)に源を発する松葉川を源流として，窪川台地を蛇行しながら流れ，途中広見川など多くの支流と合流して土佐湾に注ぐ全長177km，総流域面積2,267km²の四国第二，高知県第一の河川である四万十川の下流域に位置している。地理的にみると北の堂ヶ森山系，南の貝ヶ森山系，東の火打山系に囲まれた四万十川下流域の平野部と北の堂ヶ森山系，南の貝ヶ森山系に挟まれた中筋川流域の平野部を併せた中村平野があり，東は火打山系に連なる仏ヶ森，石見寺山が幡多郡大方町，南は貝ヶ森山系が幡多郡三原村，土佐清水市，北は堂ヶ森山系が幡多郡大正町，十和村，西土佐村との境をなし，北に行くにしたがって山地の標高が増し堂ヶ森(857m)が市内最高地点となっている。貝ヶ森山系や堂ヶ森山系などに囲まれた平野部は四万十川や中筋川の堆積作用によって生じた沖積平野からなり，堂ヶ森山系，貝ヶ森山系，火打山系を水源とする河川はそれぞれの谷に埋積谷を形成して小規模の低地をつくり，四万十川や中筋川，後川に流れ込んでいる。

中村平野で最も広い面積を有するのが中筋川流域である。この中筋川は上流域と下流域の高低差が殆どないばかりか，中流域では下流域より標高が低い所もあり，洪水時には四万十川との合流地点からの逆流現象がみられる。この中筋川流域や四万十川・後川流域には自然堤防と後背湿地が存在し，中村市街地周辺の遺跡はこの自然堤防上に立地している。また，自然堤防に閉塞された部分には後背湿地があり，この後背湿地には独立丘陵や自然堤防状の微高地が存在している。

今回調査を行った不破遺跡は四万十川左岸の自然堤防及び砂礫堆上に位置している¹⁾。調査区は砂礫堆上に位置しており，調査で確認された堆積も大部分がシルト質砂から砂であった。このことから調査区付近は増水時には水没する氾濫原と考えられ，本遺跡における中心は不破遺跡の北東側に存在する自然堤防上と考えられる。

2. 歴史的環境

中村市内で確認されている遺跡は208遺跡にのぼり，最古の遺跡は表採された石鏃と尖頭器の形態から縄文時代早期と考えられる国見遺跡と大用遺跡である。中期においては船元式土器や里木Ⅱ式土器との関連が考えられる土器が出土している国見遺跡²⁾が挙げられる。後期になると遺跡数が多くなり，有岡遺跡，国見遺跡，大用遺跡，勝間遺跡などで当該期の遺物が出土している。晩期では入田遺跡，中村貝塚，船戸遺跡などがある。また，船戸遺跡からは平城式土器，片粕式土器，西部九州の北久根山式土器，東部九州の西平式土器が確認されており³⁾，人々の活発な交流が

想像される。

弥生時代では前期の代表的な遺跡として遠賀川系土器と縄文時代晩期系土器が伴って出土している入田遺跡が挙げられ、国見遺跡では前期中葉の竪穴住居跡が確認されている⁽⁴⁾。また、中筋川中流域に所在する西ノ谷遺跡からは前期後葉に比定される土器が一括して出土している⁽⁵⁾。中期では平成7年度に発掘調査が行われた具同中山遺跡群Ⅱ-1⁽⁶⁾や平成13年度に発掘調査が実施された久木ノ城跡・遺跡から当該期の遺構・遺物が確認されている。久木ノ城跡・遺跡は前述した西ノ谷遺跡の北西約300m、比高差約25mの丘陵上に所在する高地性集落で、竪穴住居跡2軒などが検出されている。このように当時の人々は弥生時代を通じて、四万十川・中筋川中流域から下流域に

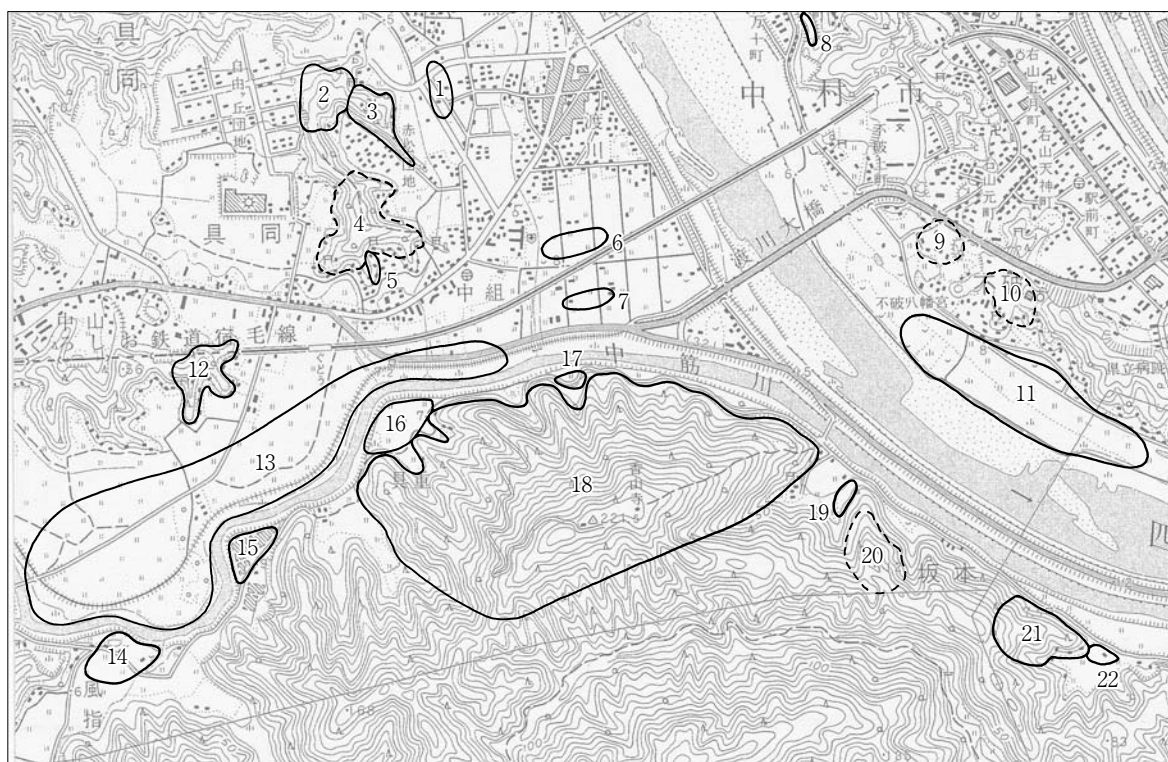


Fig.5 周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)

Tab.1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	田黒遺跡	中世	9	不破城跡	中世	17	具重下遺跡	中世
2	扇城跡	中世～近世	10	潰ノ谷城跡	〃	18	香山寺跡	中世～近世
3	ナリカド城跡	〃	11	不破遺跡	〃	19	坂本遺跡	中世
4	栗本城跡	〃	12	近沢城跡	〃	20	皇子山遺跡	〃
5	西和田遺跡	弥生	13	具同中山遺跡群	縄文～近世	21	サラガミネ遺跡	〃
6	五反田遺跡	中世	14	風指遺跡	弥生～中世	22	馬場谷遺跡	縄文・中世
7	永田遺跡	〃	15	アヅノ遺跡	古代～中世			
8	岩崎山遺跡	弥生	16	具重遺跡	古墳			

かけて居住域を拡大し、集落を形成していたと考えられる。

古墳時代において著名な遺跡は具同中山遺跡群である。中筋川下流域の自然堤防上において数百年に亘って連綿と祭祀が行われた遺跡で、昭和61年度から発掘調査が行われており、土師器の甕・高杯や須恵器の杯蓋・杯身、手捏ね土器、土製・石製模造品など多くの遺物が出土している。遺構では平成12年度に発掘調査が実施された具同中山遺跡群Ⅲ-3において本遺跡内で初めてとなる竪穴住居跡が1軒検出されている⁽⁷⁾。また、中村市には古津賀古墳や竹島古墳など古墳も存在し、その他の古墳時代の遺跡には古津賀遺跡、角崎遺跡、佐岡遺跡などがある。

古代の遺跡では、風指遺跡や船戸遺跡などが挙げられ、風指遺跡からは緑釉陶器を含む当該期の遺物が纏まって出土している⁽⁸⁾。また、承平年間(931~936)に作られたとみられる『倭名類聚抄』によると、土佐7郡で郷名43郷が記載されており、幡多郡には大方郷、鯨野郷、山田郷、枚田郷、宇和郷がみられる。このうち中村市は宇和郷が当てはまると考えられるが定かではない。

中世になると幡多郡は幡多荘と呼ばれており、中村市はその中核地であったとみられる。一条氏が応仁元年(1467)に起った応仁の乱を避けて幡多郡に下向し、中村の地を本拠地として、京の文化を取り入れながら都市的要素を広めていったと考えられる。今回調査を行った不破遺跡も当該期の遺跡である。本遺跡の北西には一条氏が京都の岩清水八幡宮から勧請した不破八幡宮が存在することや本調査において土師質土器などが出土していることから周辺には中世に集落が形成されていたと推察される。また、四万十川や中筋川などの流域には山城が多く築かれており、河川流通を監視する機能を果たしていたとみられる。一条氏の没落後、中村は長宗我部氏の直轄領となっており、近世以降においては土佐に入国してきた山内氏によって山内一豊の弟山内修理亮康豊が配され、周辺の支配を行ったが、のちに断絶している。また、近年の発掘調査で市街地から17~18世紀代の陶磁器が出土しており、近世屋敷地の存在を示唆している。

註

- (1) 土地分類基本調査『宿毛・土佐中村』国土調査 高知県 1974
- (2) 曾我貴行『国見遺跡』中村市教育委員会 1994
- (3) 出原恵三・松田直則・曾我貴行・坂本憲昭・竹村三菜・武吉眞裕『船戸遺跡』-中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996
- (4) (2)に同じ
- (5) 出原恵三・曾我貴行『西ノ谷遺跡』-中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993
- (6) 松田直則・伊藤強・山崎正明・筒井三菜・久我隆芳『具同中山遺跡群Ⅱ-1』-中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000
- (7) 廣田佳久・田坂京子・山本純代『具同中山遺跡群Ⅲ-3』-中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002
- (8) 出原恵三・廣田佳久・松田直則『風指遺跡・アゾノ遺跡』-後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ- 高知県教育委員会 1989

参考文献

『中村市史』中村市教育委員会

第Ⅲ章 調査の経過

1. 調査の経過

不破遺跡は高知県教育委員会が昭和61年から実施した遺跡分布調査によって確認された中世を中心とする遺跡である。調査によって検出された遺構は近代のものであるが、本調査区の北側に所在する不破八幡宮の存在や、本調査において古代の土師器杯蓋や土師質土器小皿などが出土していることから、本調査区周辺には当該期の遺構の存在も推測できる。

調査は平成13年度に実施された試掘調査の結果に基づき、遺跡範囲内における工事予定区域6,664㎡のうち、県道山路中村線より河川側については橋脚建設予定地2カ所(東側Ⅱ区、西側Ⅲ区)の本発掘調査を実施した。また、県道より丘陵側の橋脚予定地1カ所については確認調査(Ⅰ区確認トレンチ)を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査期間は平成14年10月15日から平成15年1月15日の実働55日で、調査面積はⅠ区確認トレンチが10㎡、Ⅱ区が854㎡である。Ⅲ区においては検出面が3面あったことから3回に互って調査を行い、第1次検出面が592㎡、第2次検出面が595㎡、第3次検出面が595㎡で調査延べ面積は1,782㎡であった。本発掘調査及び試掘確認調査の合計面積は2,646㎡である。

2. 調査日誌抄

Ⅰ区 2002.10.15

10.15 確認トレンチを1カ所設定し調査を行う。

Ⅱ区 2002.10.16~12.3

10.16 調査区の周囲に安全柵を設置し、重機による表土掘削を行う。

現場作業を中止する。

10.17 引き続き調査区周囲の安全柵設置並びに重機による表土掘削を行う。

11.1 雨天のため現場作業を中止する。

10.18 重機による表土掘削を行う。

11.5 遺構調査並びに写真撮影用のローリングタワーを設置する。

10.21 雨天のため現場作業を中止する。

11.6 遺構調査並びに遺構平面図を作成する。

10.22 重機による表土掘削を完了する。調査区内のグリッド杭設置並びに遺構検出作業を行う。

11.7 遺構及び北・南壁セクションの調査並びに

10.23 引き続き調査区内のグリッド杭設置並びに遺構検出作業を行う。

10.24 遺構検出作業を行う。

10.25 遺構検出作業を行う。

10.28 遺構検出作業を行う。

10.29 遺構検出作業を行った後、検出状態の写真撮影を行う。

10.30 調査区南東部より遺構調査を開始する。

10.31 引き続き遺構調査を行う。午後は雨のため



Fig.6 発掘調査風景

- 遺構平面図を作成する。
- 11.8 遺構調査と併行して、南壁セクション及びバンクの写真撮影及び実測を行う。
 - 11.13 遺構調査と併行して、遺構平面図の作成並びにバンクの調査及び実測を行う。
 - 11.14 遺構調査と併行して、遺構平面図の作成並びにバンクの調査及び実測を行う。
 - 11.15 雨天のため現場作業を中止する。
 - 11.18 南壁セクションの調査及び写真撮影を行い、調査区内の清掃を行う。
 - 11.19 北壁セクションの調査及び遺構完掘状態の写真撮影を行う。
 - 11.20 遺構完掘状態の航空測量・撮影を行う。

III区 2002.10.24~2003.1.15

- 10.24 重機による表土掘削を開始する。
- 10.25 重機による表土掘削を行う。
- 10.28 重機による表土掘削を行う。
- 11.14 重機掘削と併行して、遺構検出作業を行う。
- 11.19 遺構検出作業と併行して、写真撮影用のローリングタワーの設置を行う。
- 11.20 遺構検出作業並びに写真撮影用のローリングタワーの設置を行う。
- 11.21 遺構検出作業を行う。
- 11.22 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.25 遺構検出作業終了後、検出状態の写真撮影を行い、遺構調査を開始する。
- 11.26 遺構調査を行う。
- 11.27 遺構調査を行う。
- 11.28 遺構調査を行う。
- 11.29 調査区内の清掃後、第1次検出面完掘状態の写真撮影を行う。
- 12.2 第1次検出面完掘状態の航空測量・撮影を行い、引き続き第2次検出面の遺構調査を行う。
- 12.3 遺構調査を行う。
- 12.9 遺構調査を行う。
- 12.10 遺構の調査並びに調査区内の清掃を行う。
- 12.11 調査区の清掃後、遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 12.12 第2次検出面完掘状態の航空測量・撮影を行った後、遺構調査を行う。
- 12.13 遺構調査を行う。

- 11.21 南・北壁セクションの実測並びに北壁セクションの調査及び写真撮影を行う。
- 11.22 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.25 北壁セクションの調査を行う。
- 11.26 南壁セクションの調査を行う。
- 11.28 南壁セクションの調査を行う。
- 11.29 南壁セクションの調査並びに写真撮影を行う。
- 12.2 北壁セクションの調査並びに那須孝悌氏(大阪市立自然史博物館館長)から御指導を受ける。
- 12.3 下層確認トレンチの調査並びに那須孝悌氏から御指導を受ける。本日でII区の調査を終了する。



Fig.7 空撮風景

- 12.16 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.17 遺構調査並びに辻本裕也氏(パリオ・サーヴェイ株式会社)が現場調査を行う。
- 12.18 遺構調査並びに辻本裕也氏が土壌のサンプリングを行う。
- 12.19 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.20 遺構調査と併行して、調査区南東部に下層確認トレンチを設定し調査を行う。
- 1.7 遺構調査並びに下層確認トレンチの調査を行う。
- 1.8 遺構調査並びに下層確認トレンチの土層断面実測及び写真撮影を行う。
- 1.9 遺構調査終了後、第3次検出面完掘状態を撮影する。
- 1.10 第3次検出面完掘状態を撮影する。
- 1.15 第3次検出面完掘状態の航空測量・撮影を行い、全ての現場作業が終了する。

第Ⅳ章 調査の概要

1. 調査の概要

本調査では、近代の遺構を検出した。Ⅱ・Ⅲ区において検出された遺構は四万十川に平行して延びる畝間で、これらは昭和8年以降に行われた土砂採掘削工事によって生じた畝状遺構の間で確認された。

2. Ⅰ区確認トレンチ

流れ込みと考えられる土師質土器片が第Ⅱ層から7点、第Ⅲ層から11点出土した。

(1) 層序

- 第Ⅰ層 客土
- 第Ⅱ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層
- 第Ⅲ層 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質砂層
- 第Ⅳ層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂層
- 第Ⅴ層 灰オリーブ色(5Y4/2)砂層

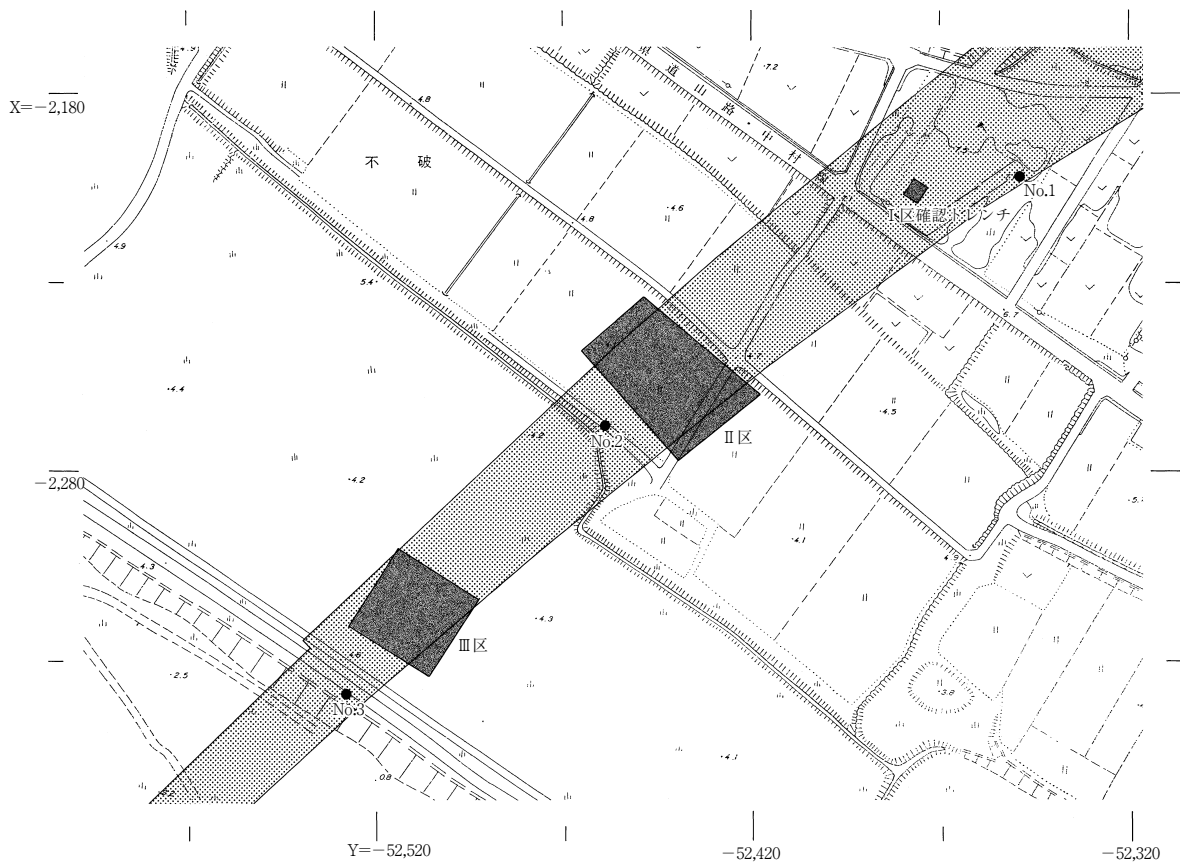


Fig.8 不破遺跡調査区全体図及び基準点配置図 (S=1/2,000)

- 第Ⅵ層 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂層
- 第Ⅶ層 灰色 (5Y4/1) 砂層
- 第Ⅷ層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質砂層

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅲ層出土遺物

土師質土器 (Fig.10-1)

1は羽釜で、口縁部のみ残存する。口縁部外面には鐙が巡り、口縁部内外面にはナデ調整、胴部内面にはヨコ方向のハケ調整、胴部外面には斜め方向のタタキを施す。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

土製品 (Fig.10-2)

2は土錘で、約1/2が残存する。残存長2.4cm、全幅1.1cm、全厚1.2cm、孔径0.5cmを測り、調整は摩耗が著しく不明である。

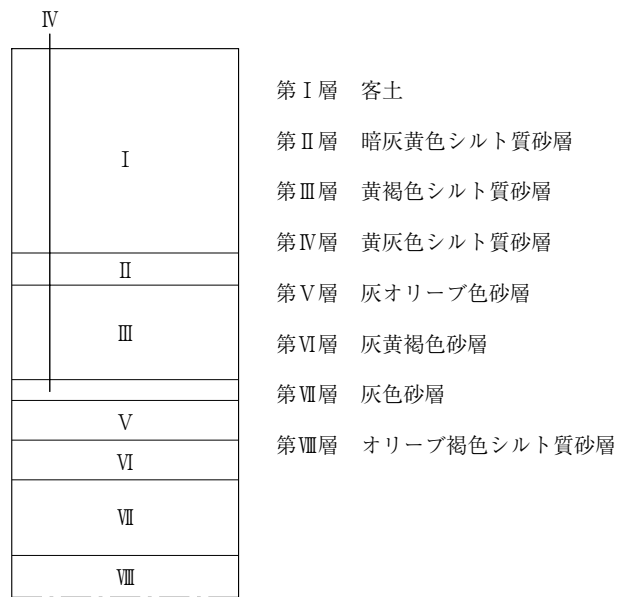


Fig.9 I区確認トレンチ柱状図 (S=1/20)

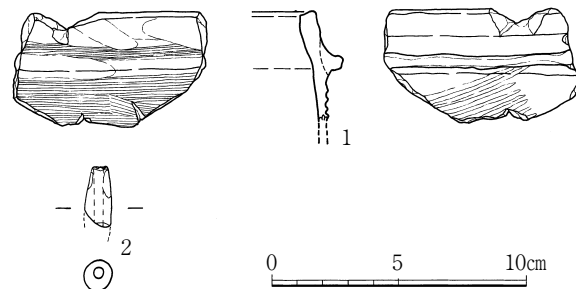


Fig.10 I区確認トレンチ出土遺物実測図(土師質土器など)

3. II区

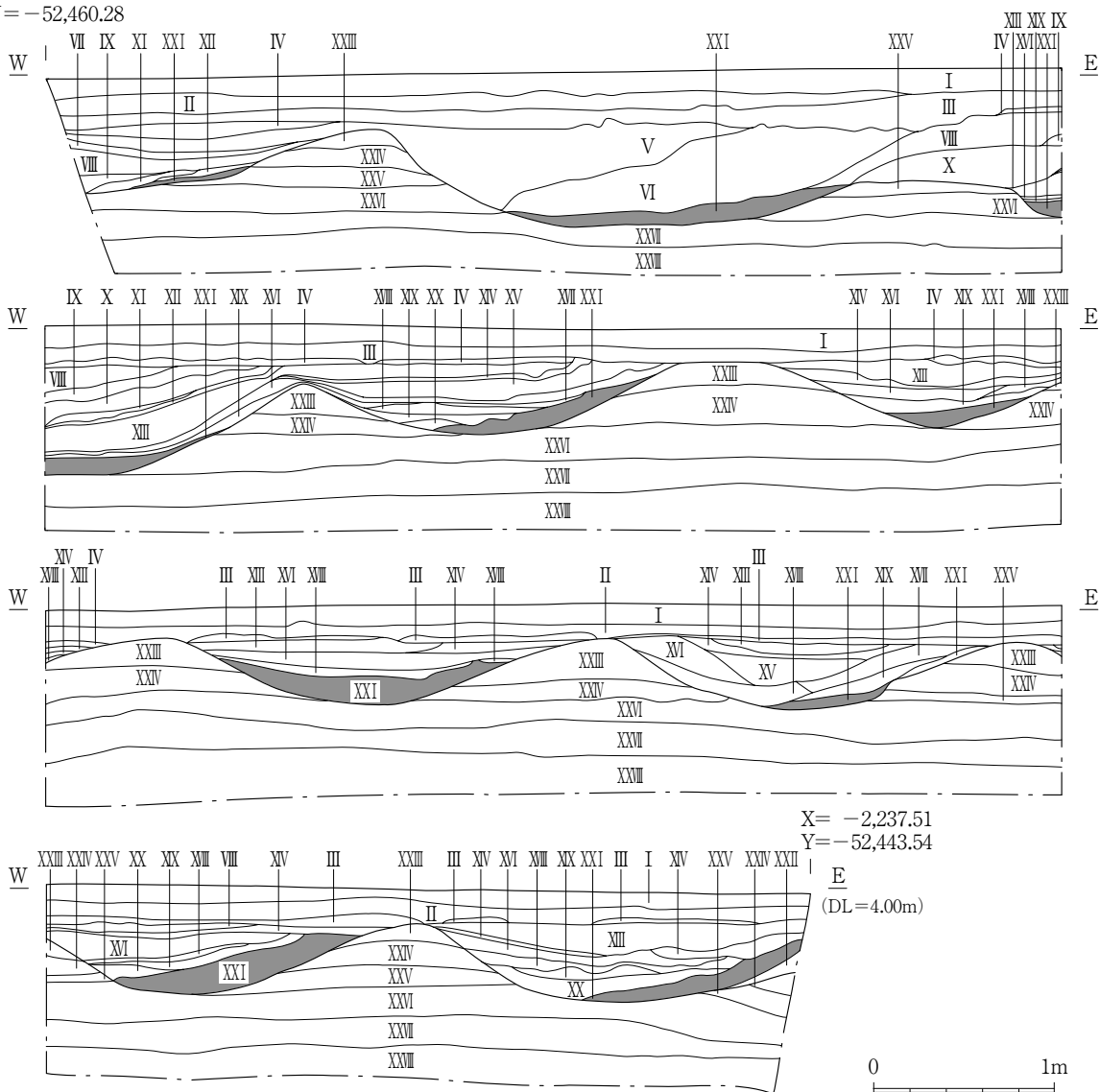
(1) 層序

本調査区で認められた層序は、基本的に現在の耕作土層、戦中・戦後の自然堆積層、基盤の自然堆積層の順となっており、畝間は戦前の土木工事によって残された畝状遺構の間で確認された。

調査区で確認された層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト層
- 第Ⅱ層 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト層
- 第Ⅲ層 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト層で鉄分の沈着がみられる
- 第Ⅳ層 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト層で黄褐色砂質シルトのブロックを含む
- 第Ⅴ層 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂層で鉄分の沈着がみられ、炭化物を含む
- 第Ⅵ層 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂層で鉄分の沈着がみられ、炭化物を含む
- 第Ⅶ層 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト層で鉄分の沈着がみられる
- 第Ⅷ層 褐灰色 (10YR6/1) 砂層
- 第Ⅸ層 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト質砂層で鉄分の沈着が少量みられる
- 第Ⅹ層 礫層で礫間に灰黄色砂質シルトを含む
- 第Ⅺ層 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂層で灰色砂をブロック状に含む

X = -2,250.65
Y = -52,460.28



- | | | | |
|--------|---------------------------------------|----------|--------------------------------|
| 層位 | | | |
| 第I層 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト層 | 第XIV層 | 灰色 (5Y6/1) 砂質シルト層 |
| 第II層 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト層 | 第XV層 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂層で鉄分の沈着がみられる |
| 第III層 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト層で鉄分の沈着がみられる | 第XVI層 | にぶい褐色 (7.5YR5/3) 砂層 |
| 第IV層 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト層で黄褐色砂質シルトのブロックを含む | 第XVII層 | 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト質砂層 |
| 第V層 | オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂層で鉄分の沈着がみられ,炭化物を含む | 第XVIII層 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト層 |
| 第VI層 | 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂層で鉄分の沈着がみられ,炭化物を含む | 第XIX層 | にぶい褐色 (7.5YR5/3) 砂層 |
| 第VII層 | 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト層で鉄分の沈着がみられる | 第XX層 | にぶい褐色 (10YR5/3) 粘土質シルト層 |
| 第VIII層 | 褐灰色 (10YR6/1) 砂層 | 第XXI層 | にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂質シルト層 |
| 第IX層 | 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト質砂層で鉄分の沈着が少量みられる | 第XXII層 | 灰黄色 (7.5YR4/2) 砂層で円礫を含む |
| 第X層 | 礫層で礫間に灰黄色砂質シルトを含む | 第XXIII層 | 1~10cm大の円礫で構成される礫層で礫間に砂を含む |
| 第XI層 | 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂層で灰色砂をブロック状に含む | 第XXIV層 | 1~3cm大の円礫で構成される礫層で礫間に砂を含む |
| 第XII層 | 黄灰色 (2.5YR6/1) 粘土質シルト層 | 第XXV層 | 0.5~1cm大の円礫で構成される礫層で礫間に砂を含む |
| 第XIII層 | 褐色 (7.5YR4/3) 砂層 | 第XXVI層 | 0.5~5cm大の円礫で構成される礫層で礫間に褐色粘土を含む |
| | | 第XXVII層 | 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂層で1~5cm大の円礫を含む |
| | | 第XXVIII層 | 1~3cm大の円礫で構成される礫層で礫間に砂を含む |

Fig.11 II区北壁セクション図 (S=1/40)

- 第XII層 黄灰色 (2.5YR6/1) 粘土質シルト層
- 第XIII層 褐色 (7.5YR4/3) 砂層
- 第XIV層 灰色 (5Y6/1) 砂質シルト層
- 第XV層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂層で鉄分の沈着がみられる
- 第XVI層 にぶい黄褐色 (7.5YR5/3) 砂層
- 第XVII層 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト質砂層
- 第XVIII層 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 砂層
- 第XIX層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土質シルト層
- 第XX層 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 砂層
- 第XXI層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト層
- 第XXII層 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂層で円礫を少量含む
- 第XXIII層 1～10cm大の円礫で構成される礫層で礫間に砂を含む
- 第XXIV層 1～3cm大の円礫で構成される礫層で礫間に砂を含む
- 第XXV層 0.5～1cm大の円礫で構成される礫層で礫間に砂を含む
- 第XXVI層 0.5～5cm大の円礫で構成される礫層で礫間に褐色粘土を含む
- 第XXVII層 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂層で1～5cm大の円礫を含む
- 第XXVIII層 1～3cm大の円礫で構成される礫層で礫間に砂を含む

第I層は現在の耕作土、第II層から第XIII層までは戦中・戦後の自然堆積で、第XIII層以下は円礫で構成される自然堆積層である。

(2) 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

土師質土器 (Fig.12-3)

3は羽釜で、口縁部のみ残存する。口縁部外面には鑊が巡り、口縁部内外面にはナデ調整、胴部外面には斜め方向のタタキを施す。色調は、内面が黄橙色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

土製品 (Fig.12-4・5)

4・5は土錘で、ともに調整は摩耗が著しく不明である。4は残存長2.9cm、全幅1.3cm、全厚1.2cm、孔径0.5cm、5は残存長3.3cm、全幅1.4cm、全厚1.4cm、孔径0.5cmを測る。

近代磁器 (Fig.12-6)

6は碗で、約1/3が残存する。口径6.9cm、器高3.0cm、底径2.8cmを測り、体部は内湾しながら立

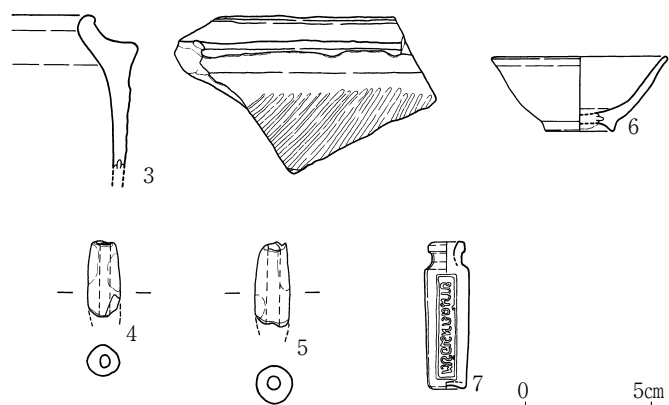


Fig.12 II区第I層出土遺物実測図(土師質土器・土製品など)

ち上がり、口縁部はやや外反する。器面には乳白色の釉を施し、畳付及び高台内には砂粒が付着する。

ガラス製品 (Fig.12-7)

7は小瓶で、口径0.9cm、器高5.8cm、底径1.2cmを測る。内部にコルク栓が残存し、外面には文字がみられる。

(3) 遺構と遺物

① 畝間

調査区全面で13条の畝状遺構を確認し、これらの中で13条の畝間を検出した。主軸方向はN-57°-Wで、これらの畝間は1.45~2.02mの間隔で平行に延びる。また、埋土からは近世・近代陶磁器片に混じって枕木止めの釘や石炭片が出土している。

畝間1

調査区北部で検出した畝間である。幅0.57~0.75mで、検出面の標高は北端が3.374m、南端が3.398mとほぼ平坦で、6.50mを検出した。埋土は8層に分層され、1層(第Ⅲ層)が褐色(7.5YR4/3)砂、2層(第Ⅳ層)が灰色(5Y6/1)砂質シルト、3層(第Ⅴ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、4層(第Ⅵ層)がにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト、5層(第Ⅶ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、6層(第Ⅷ層)がにぶい褐色(10YR5/3)粘土質シルト、7層(第Ⅷ層)がにぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルト、8層(第Ⅷ層)が灰黄色(2.5Y6/2)砂である。出土遺物は皆無であった。

畝間2

調査区北部で検出した畝間である。幅0.50~0.87mで、検出面は北(3.558m)から南(3.361m)に向かって傾斜しており、30.70mを検出した。埋土は7層に分層され、1層(第Ⅷ層)が褐灰色(10YR6/1)砂、2層(第Ⅳ層)が灰色(5Y6/1)砂質シルト、3層(第Ⅴ層)がにぶい褐色(10YR5/3)砂、4層(第Ⅵ層)がにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト、5層(第Ⅶ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、6層(第Ⅷ層)がにぶい褐色(10YR5/3)粘土質シルト、7層(第Ⅷ層)がにぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルトである。出土遺物には土師質土器片6点、近代陶磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

畝間3

調査区北部で検出した畝間である。幅0.37~0.88mで、検出面は北(3.600m)から南(3.331m)に向かって傾斜しており、36.40mを検出した。埋土は8層に分層され、1層(第Ⅲ層)が褐色(7.5YR4/3)砂、2層(第Ⅳ層)が灰色(5Y6/1)砂質シルト、3層(第Ⅳ層)がにぶい黄褐色(10YR5/3)砂、4層(第Ⅴ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、5層(第Ⅵ層)が黄灰色(2.5Y6/1)シルト質砂、6層(第Ⅶ層)がにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト、7層(第Ⅷ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、8層(第Ⅷ層)がにぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルトである。出土遺物には土師質土器片3点、近世陶磁器片2点がみられ、近世磁器1点(8)が図示できた。

出土遺物

近世磁器 (Fig.18-8)

8は皿で、底部の約1/6が残存する。底径14.1cmを測り、外面と高台内に圏線を引く。器面には

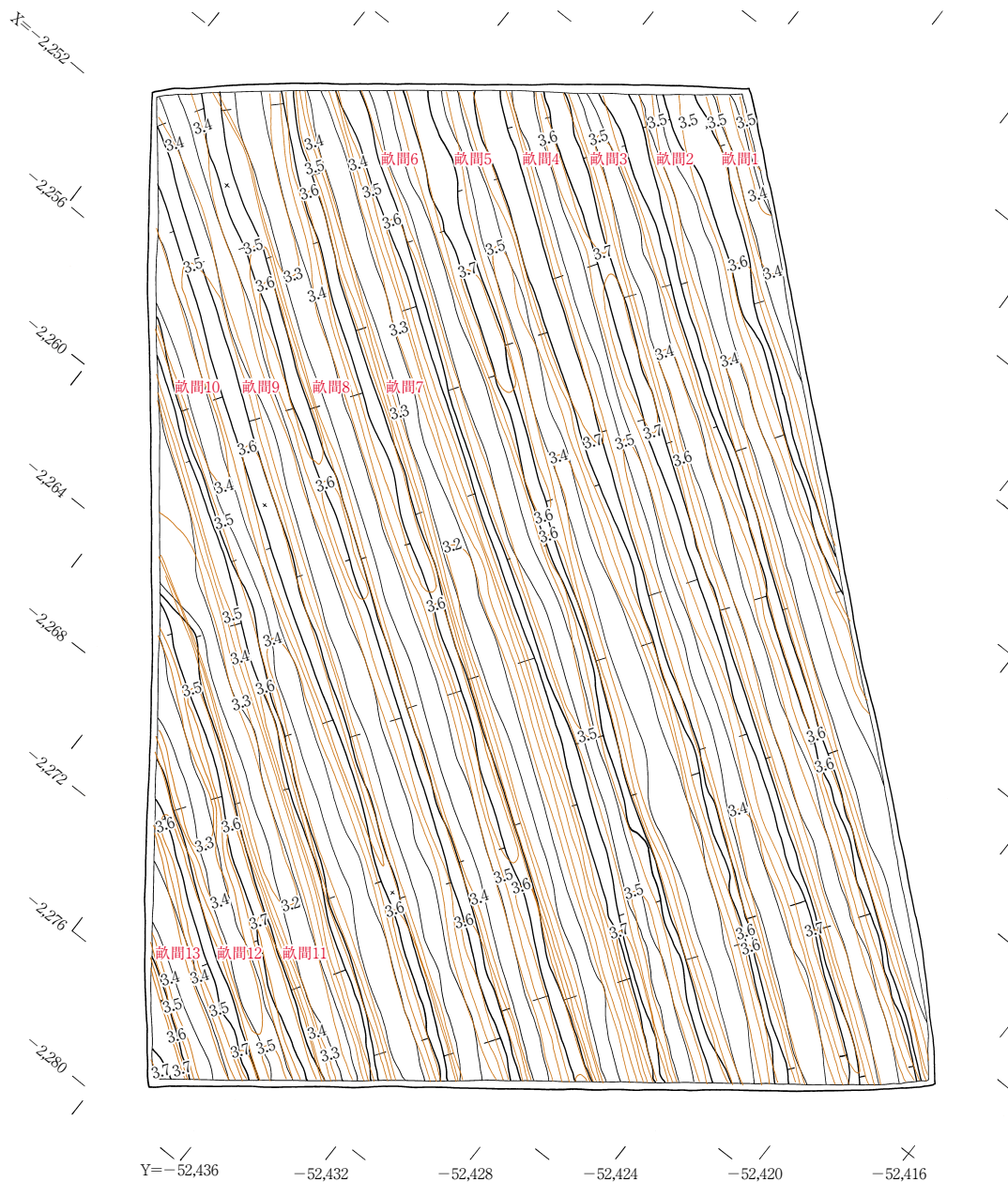


Fig.13 II区遺構平面図 (S=1/250)

やや青味を帯びた透明釉を薄く施し、畳付は露胎である。

畝間4

調査区北部で検出した畝間である。幅0.48～1.02mで、検出面は北(3.476m)から南(3.294m)に向かって傾斜しており、36.40mを検出した。埋土は5層に分層され、1層(第Ⅳ層)が褐色(7.5YR4/3)砂、2層(第Ⅴ層)が灰色(5Y6/1)砂質シルト、3層(第Ⅵ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、4層(第Ⅶ層)がにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト、5層(第Ⅷ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂である。出土遺物には土師質土器片8点、近代陶磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

畝間5

調査区中央部で検出した畝間である。幅0.30～1.37mで、検出面は北(3.490m)から南(3.314m)に

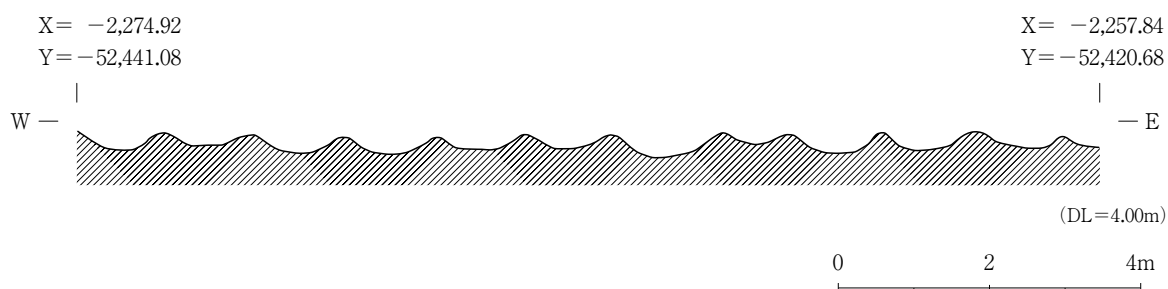


Fig.14 II区畝間エレベーション図 (S=1/100)

向かって傾斜しており、36.40mを検出した。埋土は6層に分層され、1層(第Ⅲ層)が褐色(7.5YR4/3)砂、2層(第Ⅳ層)が灰色(5Y6/1)砂質シルト、3層(第Ⅴ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、4層(第Ⅵ層)がにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト、5層(第Ⅶ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、6層(第Ⅷ層)がにぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルトである。出土遺物には土師質土器片7点、近世陶磁器片1点、近代陶磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

畝間6

調査区中央部で検出した畝間である。幅0.25～0.80mで、検出面の標高は北端が3.394m、南端が3.359mとほぼ平坦で36.40mを検出した。埋土は9層に分層され、1層(第Ⅲ層)が褐色(7.5YR4/3)砂、2層(第Ⅳ層)が灰色(5Y6/1)砂質シルト、3層(第Ⅴ層)がにぶい黄褐色(10YR5/3)砂、4層(第Ⅵ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、5層(第Ⅶ層)が黄灰色(2.5Y6/1)シルト質砂、6層(第Ⅷ層)がにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト、7層(第Ⅷ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、8層(第Ⅸ層)がにぶい褐色(10YR5/3)粘土質シルト、9層(第Ⅹ層)がにぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルトである。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

畝間7

調査区中央部で検出した畝間である。幅0.42～0.75mで、検出面は北(3.202m)から南(3.135m)に向かって緩やかに傾斜しており、36.40mを検出した。埋土は6層に分層され、1層(第Ⅴ層)が灰褐色(7.5YR4/2)砂、2層(第Ⅵ層)が黄灰色(2.5YR6/1)粘土質シルト、3層(第Ⅶ層)が褐色(7.5YR4/3)砂、4層(第Ⅷ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、5層(第Ⅷ層)がにぶい褐色(7.5YR5/3)砂、6層(第Ⅸ層)がにぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルトである。出土遺物には近代陶磁器片1点がみられたが、復元図示できなかつた。

畝間8

調査区中央部で検出した畝間である。幅0.50～0.98mで、検出面は北(3.571m)から南(3.320m)に向かって傾斜しており、36.40mを検出した。埋土は3層に分層され、1層(第Ⅴ層)がオリーブ黒色(5Y3/2)砂、2層(第Ⅵ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)砂、3層(第Ⅷ層)がにぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルトである。出土遺物は皆無であった。

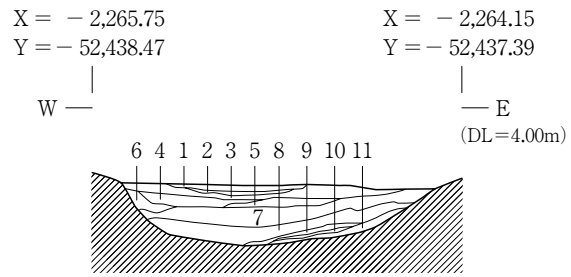
畝間9 (Fig.15)

調査区南部で検出した畝間である。幅0.48～0.96mで、検出面は北(3.374m)から南(3.264m)に向かって傾斜しており、36.40mを検出した。埋土は11層に分層され、1層が下部に褐灰色シルトが

混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 2層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 3層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 4層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 5層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 6層が黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂, 7層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 8層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 9層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 10層が黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂, 11層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂である。出土遺物は皆無であった。

畝間10 (Fig.16)

調査区南部で検出した畝間である。幅0.38~1.02mで、検出面は北(3.369m)から南(3.226m)に向かって傾斜しており、29.30mを検出した。埋土は10層に分層され、1層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 2層が黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂, 3層が黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂, 4層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 5層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 6層が褐灰色(10YR5/1)シルト質砂, 7層が褐灰色(10YR5/1)シルト質砂, 8層

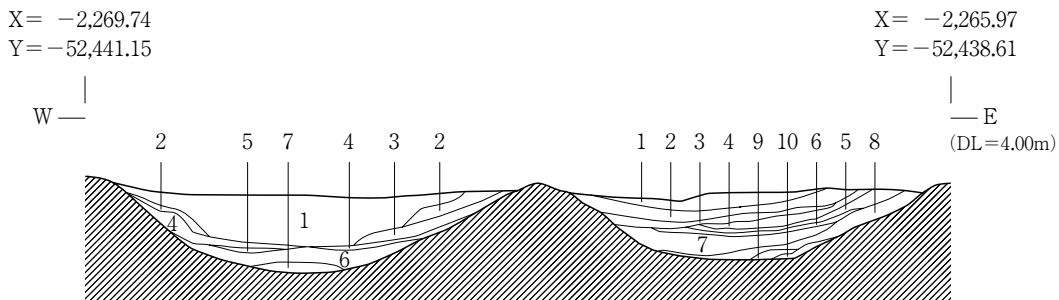


埋土(畝間9)

1. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
2. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
3. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
4. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
5. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
6. 黄灰色シルト質砂
7. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
8. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
9. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
10. 黄灰色シルト質砂
11. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる



Fig.15 畝間9



埋土(畝間11)

1. 攪乱
2. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
3. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
4. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
5. 黄灰色シルト質砂
6. 黄灰色シルト質砂
7. にぶい黄褐色砂質シルト

埋土(畝間10)

1. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
2. 黄灰色シルト質砂
3. 黄灰色シルト質砂
4. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
5. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
6. 褐灰色シルト質砂
7. 褐灰色シルト質砂
8. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
9. 暗褐色砂で下部に褐灰色シルトが混ざる
10. にぶい黄褐色砂質シルト

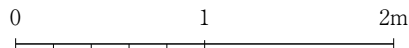


Fig.16 畝間10・11

が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 9層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 10層がにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトである。出土遺物は皆無であった。

畝間11 (Fig.16)

調査区南部で検出した畝間である。幅0.48~1.38mで, 検出面の標高は北端が3.216m, 南端が3.229mとほぼ平坦で, 20.80mを検出した。埋土は基本的に6層に分層され, 1層が下部に褐灰色シルトが

混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 2層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 3層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 4層が黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂, 5層が黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂, 6層がにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトである。出土遺物には近代陶磁器片7点がみられ, 近代陶器1点(9), 近代磁器2点(10・11)が図示できた。

出土遺物

近代陶器 (Fig.18-9)

9は甕と考えられる胴部破片である。外面と内面下部に褐色釉を施し, 外面には青色を呈する釉でタテ方向に線状の模様を描く。

近代磁器 (Fig.18-10・11)

10・11は碗である。10は瀬戸・美濃産とみられ, 約1/3が残存する。底部は欠損しており, 口径7.4cmを測る。体部は内湾して立ち上がり, 口縁部はほぼ直立する。器面には光沢のある灰白色を呈する釉を施し, 口縁端部及び口縁部内面は釉ハギを行う。11は底部のみ残存し, 底径3.6cmを測る。体部外面には草文を施す。器面には透明釉を薄く施し, 畳付は露胎である。

畝間12 (Fig.17)

調査区南部で検出した畝間である。幅0.52~0.80mで, 検出面の標高は北端が3.448m, 南端が3.445mとほぼ平坦で, 14.50mを検出した。埋土は7層に分層され, 1層が褐灰色(10YR5/1)シルト質砂, 2層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 3層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 4層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 5層が褐灰色(10YR5/1)シルト質砂, 6層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂, 7層がにぶい黄褐

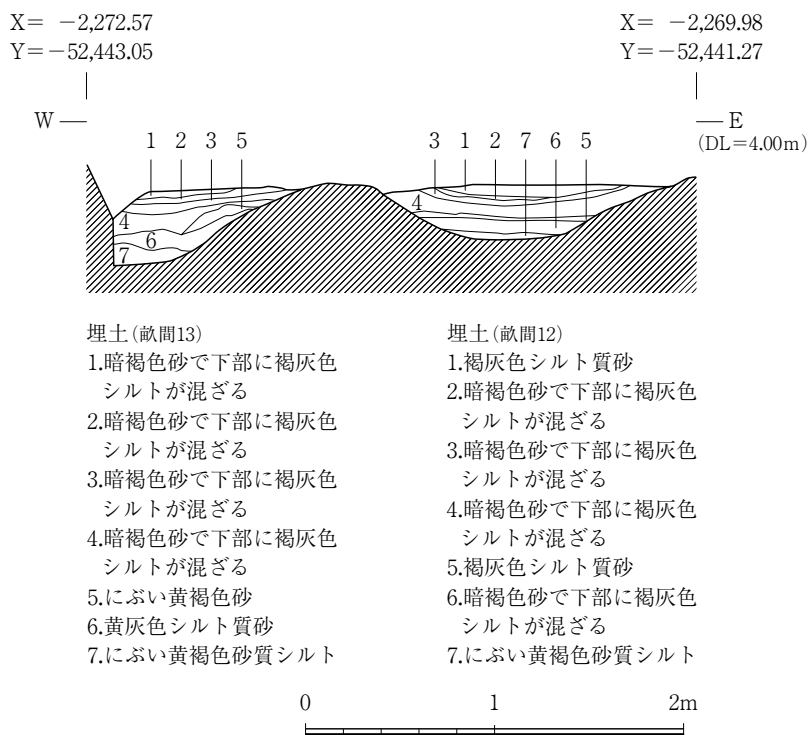


Fig.17 畝間12・13

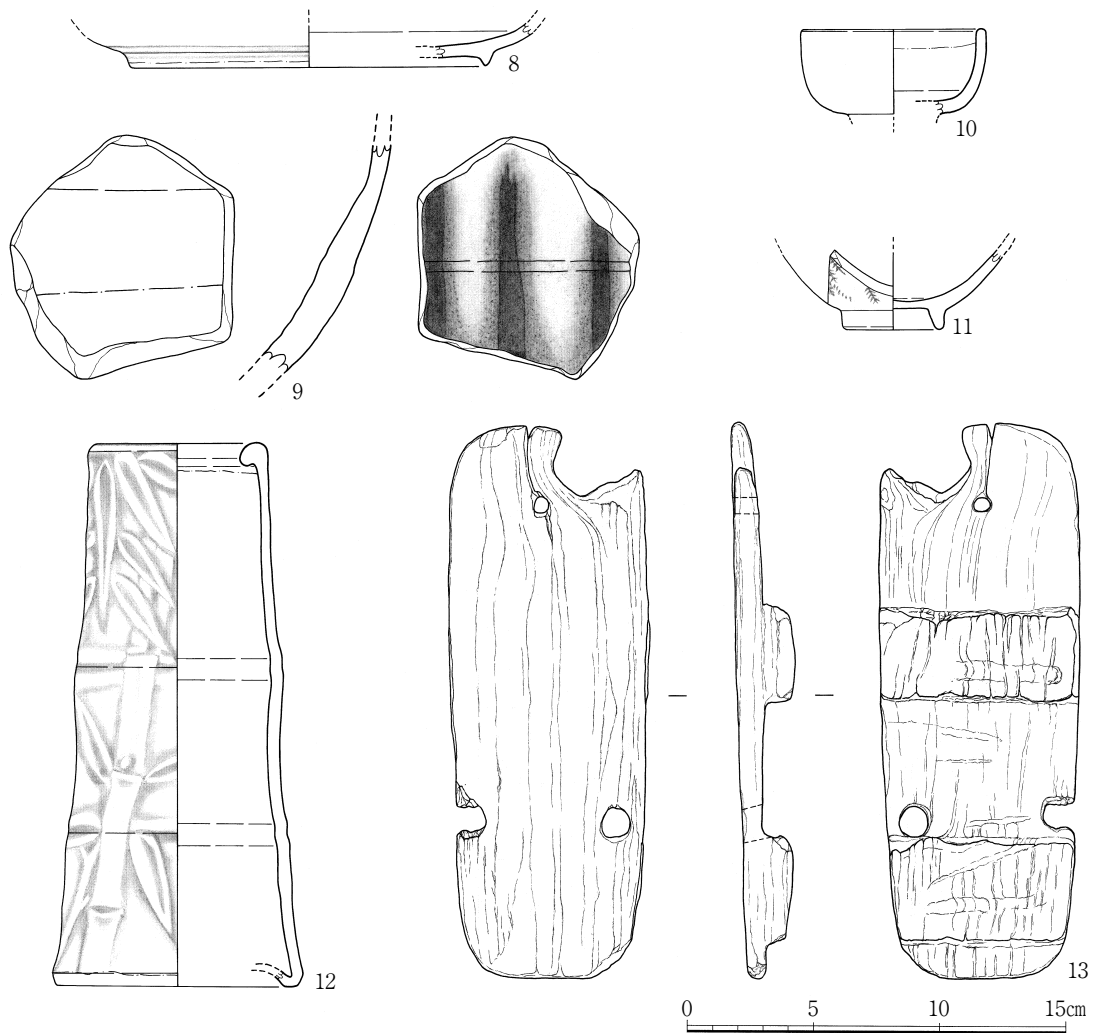


Fig.18 II区畝間出土遺物実測図(近世磁器, 近代陶磁器, 木製品)

色(10YR4/3)砂質シルトである。出土遺物には近代陶磁器片3点, 木製品1点がみられ, 近代磁器1点(12), 木製品1点(13)が図示できた。

出土遺物

近代磁器 (Fig.18-12)

12は関西系の花立で, 口径6.2cm, 器高20.3cm, 底径9.6cmを測る。断面形は台形状を呈し, 底径に対して口径は約2/3である。外面には竹をモチーフとした図柄が陽刻され, 外面のみに緑色を呈する釉を厚く施す。

木製品 (Fig.18-13)

13は下駄である。平面形は隅丸の長方形を呈し, 全長21.7cm, 全幅7.9cm, 全厚2.4cmを測る。前壺は前歯の約4.2cm前の中央, 後壺は後歯内側に接して開ける。前後歯とも削り出しており, 断面方形を呈する。

畝間13 (Fig.17)

調査区南端で検出した畝間である。幅0.50~0.88mで, 検出面は北(3.556m)から南(3.232m)に向

かって傾斜しており、6.60mを検出した。埋土は7層に分層され、1層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂、2層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂、3層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂、4層が下部に褐灰色シルトが混じる暗褐色(7.5YR3/3)砂、5層がにぶい黄褐色(10YR4/3)砂、6層が黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂、7層がにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトである。出土遺物は皆無であった。

4. III区

(1) 層序

本調査区で認められた層序は、基本的に現在の耕作土層、戦中・戦後の自然堆積層、基盤の自然堆積層の順となっており、畝間は戦前の土木工事によって残された畝状遺構の間で確認された。

調査区で確認された層序は以下のとおりである。

- 第I層 暗褐色(10YR3/3)シルト質砂層
- 第II層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質砂層
- 第III層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂層
- 第IV層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂層
- 第V層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層
- 第VI層 暗黄褐色(2.5Y4/2)シルト質砂層
- 第VII層 褐色(10YR4/4)砂層
- 第VIII層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層
- 第IX層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂層
- 第X層 褐色(10YR4/4)シルト質砂層
- 第XI層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層
- 第XII層 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂層で部分的に炭化物を含む
- 第XIII層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂層
- 第XIV層 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂層
- 第XV層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層で部分的に炭化物を含む
- 第XVI層 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト層
- 第XVII層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層
- 第XVIII層 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層で鉄分の沈着がみられる
- 第XIX層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層
- 第XX層 暗灰黄色(2.5YR4/2)シルト質砂層
- 第XXI層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層で部分的に炭化物を含む
- 第XXII層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層
- 第XXIII層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層で極細粒砂を含む
- 第XXIV層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層
- 第XXV層 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層で鉄分の沈着がみられる

X = -2,321.55
 Y = -52,522.82

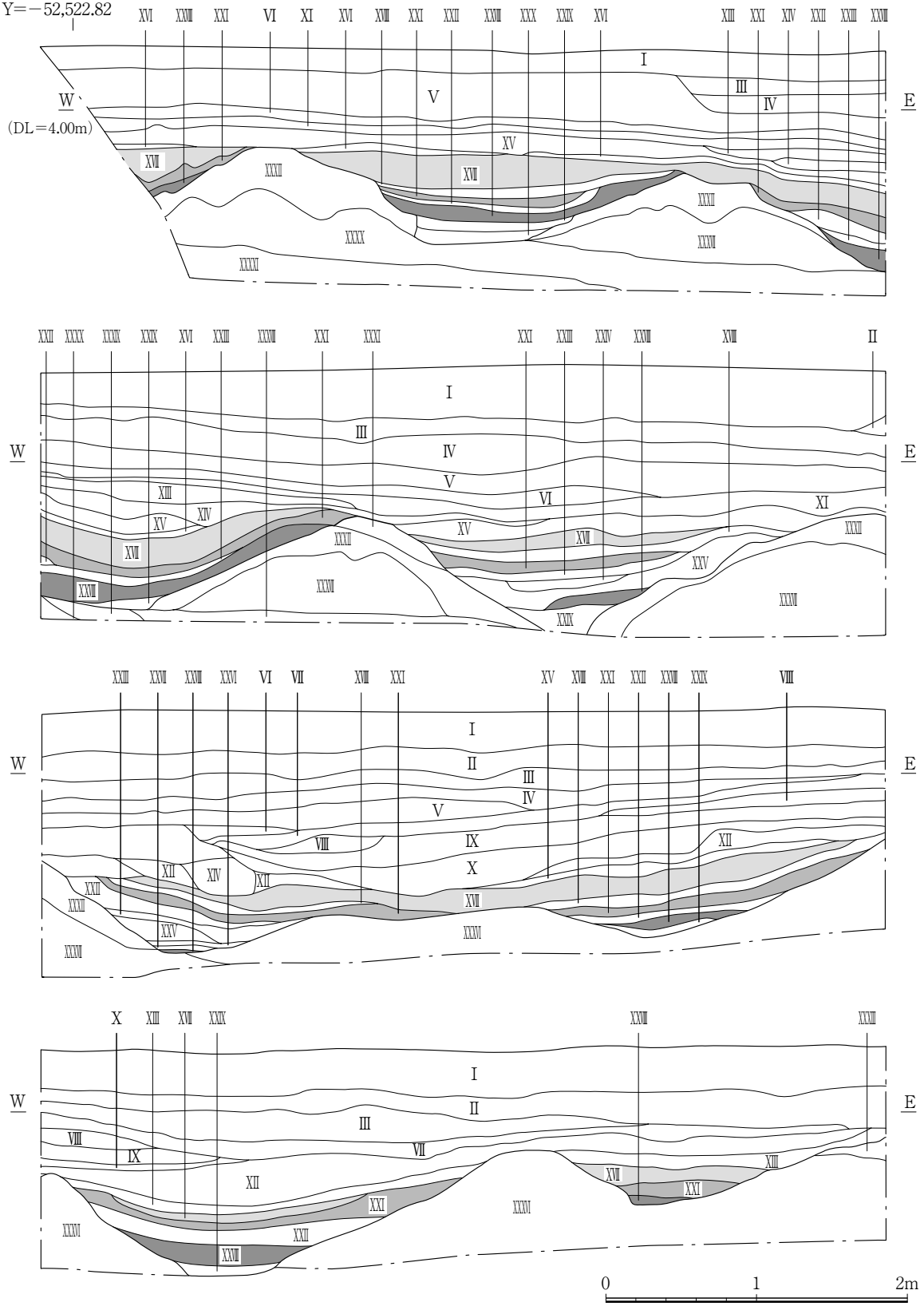
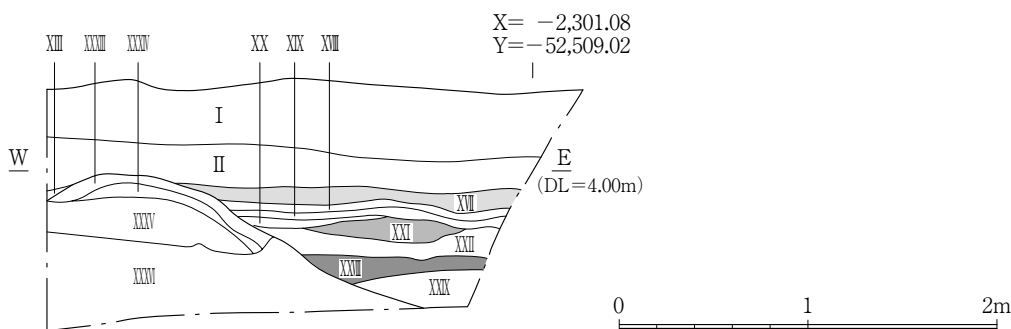


Fig.19 III区北壁セクション図1 (S=1/40)



層位			
第I層	暗褐色(10YR3/3)シルト質砂層	第XXIII層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層で極細粒砂を含む
第II層	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質砂層	第XXIV層	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層
第III層	灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂層	第XXV層	黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層で鉄分の沈着がみられる
第IV層	黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂層	第XXVI層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂層
第V層	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層	第XXVII層	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層で部分的にマンガ
第VI層	暗黄褐色(2.5Y4/2)シルト質砂層	第XXVIII層	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層で部分的に炭
第VII層	褐色(10YR4/4)砂層	第XXIX層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層で極細粒砂を
第VIII層	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層	第XXX層	含む
第IX層	灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂層	第XXXI層	暗褐色(10YR3/4)シルト質砂層
第X層	褐色(10YR4/4)シルト質砂層	第XXXII層	にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
第XI層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層	第XXXIII層	1~10cm大を主体とする礫層
第XII層	にぶい黄褐色(10YR4/3)砂層で部分的に炭化物を	第XXXIV層	黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層で鉄分の沈着がみら
	含む	第XXXV層	れる
第XIII層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂層	第XXXVI層	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層
第XIV層	黒褐色(10YR3/2)シルト質砂層	第XXXVII層	にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
第XV層	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層で部分的に炭	第XXXVIII層	1~10cm大を主体とする礫層
	化物を含む	第XXXIX層	暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層
第XVI層	黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト層	第XL層	1~10cm大を主体とする礫層
第XVII層	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層	第XLI層	暗褐色(10YR3/4)シルト質砂層
第XVIII層	黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層で鉄分の沈着がみら	第XLII層	灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂層
	れる	第XLIII層	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層
第XIX層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層		
第XX層	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層		
第XXI層	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層で部分的に炭		
	化物を含む		
第XXII層	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層		

Fig.20 III区北壁セクション図2 (S=1/40)

- 第XXIV層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂層
- 第XXV層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂層で部分的にマンガ
- 第XXVI層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層で部分的に炭化物を含む
- 第XXVII層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層で極細粒砂を含む
- 第XXVIII層 暗褐色(10YR3/4)シルト質砂層
- 第XXIX層 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第XXX層 1~10cm大を主体とする礫層
- 第XXXI層 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層で鉄分の沈着がみられる
- 第XXXII層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層
- 第XXXIII層 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層

- 第ⅩⅩⅩⅩ層 1～10cm大を主体とする礫層
- 第ⅩⅩⅩⅩ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層
- 第ⅩⅩⅩⅩ層 1～10cm大を主体とする礫層
- 第ⅩⅩⅩⅩ層 暗褐色(10YR3/4)シルト質砂層
- 第ⅩⅩⅩⅩ層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂層
- 第ⅩⅩⅩⅩ層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂層

第Ⅰ層は現在の耕作土で、調査前は飼料用の牧草地になっており、第Ⅱ層から第ⅩⅩⅩⅩ層までは戦中・戦後の自然堆積層で、第ⅩⅩⅩⅩ層は戦前における土砂掘削工事の攪乱と考えられる。第ⅩⅩⅩⅩ～ⅩⅩⅩⅩ層は断面観察から人為的攪乱を受けているとみられるが、遺物が出土しておらず時期は判然としない。また、第ⅩⅩⅩⅩ層からは古代の土師器が出土している。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

近世陶器 (Fig.21-14)

14は行平鍋の蓋である。在地産とみられ、ほぼ完存する。口径14.8cm、器高4.5cmを測り、天井部には径3.2cm、高さ0.8cmを測るつまみが付く。外面には5段にわたって飛鉋を施し、器面の内面と外面の一部に鉄釉を施す。

近代磁器 (Fig.21-15～19)

15～17は碗である。15は大正期以降のものとみられ、口縁部の一部が残存する。口径10.4cmを測り、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。外面に文様の一部が残し、内外面とも透明釉を薄く施す。16は大正期のもものとみられ、約1/6が残存し、口径11.4cm、器高4.5cm、底径3.6cmを測る。高台は「ハ」字状に開き、体部は平らな底部から斜め上方に屈曲して立ち上がる。外面には植物と蝶をモチーフとした文様を施す。口縁部内外面には薄く青みがかった釉、器面全体には透

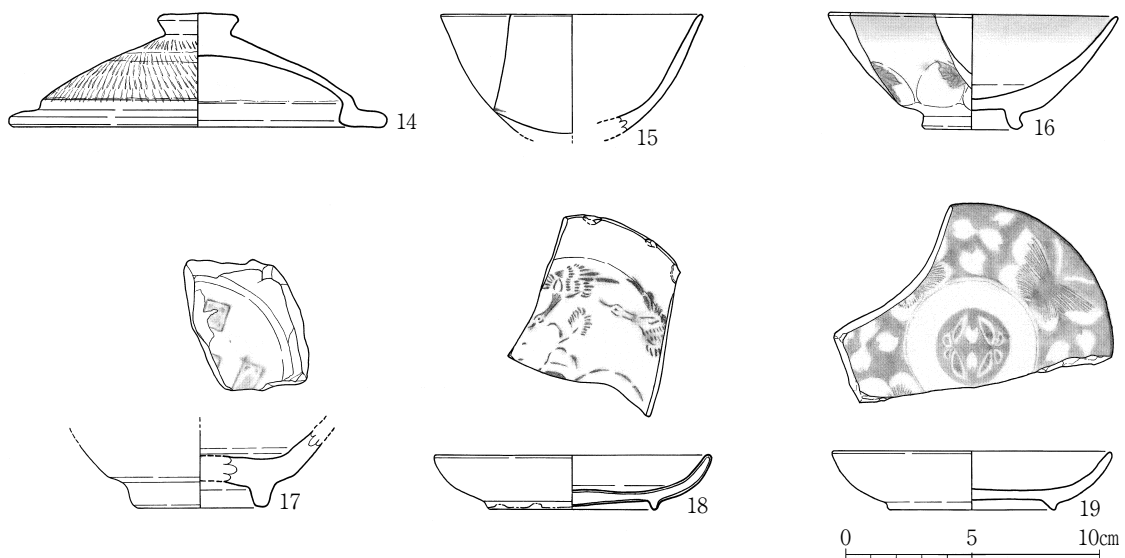


Fig.21 Ⅲ区第Ⅰ層出土遺物実測図(近世陶器, 近代磁器)

明釉を薄く施し、畳付は露胎である。17は底部のみ残存する。底径5.1cmを測り、見込には長辺1.1cm、短辺0.9cmのスタンプを刻印する。器面には明緑色を呈する釉を薄く施し、畳付及び高台内は露胎である。

18・19は皿である。18は大正期のものとみられ、口径10.8cm、器高2.1cm、底径6.4cmを測り、口縁部は内湾して立ち上がる。見込には草花文及び鶴文を施す。高台内には透明釉、他の部分には薄い緑色を呈する釉を施す。19は明治期以降のものともみられ、口径11.2cm、器高2.3cm、底径6.6cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、内面には花文及び蝶をモチーフとした文様を施す。口縁端部には褐釉、器面全体には透明釉を薄く施し、畳付は露胎である。

第Ⅷ層出土遺物

土師器 (Fig.22-20)

20は杯蓋で、口径15.3cm、器高1.8cmを測る。天井部は平らで、中央部に径2.8cm、高さ0.5cmの簡略化された擬宝珠形状のつまみが付き、口縁部は天井部から斜め下方に屈曲する。口縁部内面には回転ナデ調整の痕がみられるが、他の部位は摩耗が著しく調整不明である。色調は、内面が橙色と赤褐色、外面が淡黄色とにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

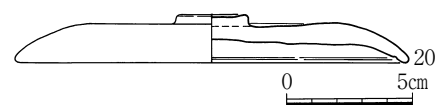


Fig.22 Ⅲ区第Ⅷ層出土遺物実測図

(3) 遺構と遺物

① 畝間

本調査区では8条の畝状遺構を確認し、これら畝状遺構の間で9条の畝間を検出した。主軸方向はN-56°-Wで、これらの畝間は1.80~3.15mの間隔で平行に延びる。また、埋土からは近世・近代陶磁器片に混じって枕木止めの釘や石炭片が出土している。

畝間1

調査区北部で検出した畝間で、北側は調査区外に続く。確認された幅は0.12~0.86mで、検出面の標高は北端3.274m、南端3.257mとほぼ平坦で、21.60mを検出した。埋土は8層に分層され、1層(第Ⅷ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、2層(第Ⅷ層)が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト、3層(第Ⅷ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト、4層(第Ⅷ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、5層(第Ⅷ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、6層(第Ⅷ層)がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、7層(第Ⅷ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、8層(第Ⅷ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂である。出土遺物には土師質土器片8点、近世陶磁器片2点、近代陶磁器片2点がみられ、近世磁器1点(21)、近代磁器1点(22)が図示できた。

出土遺物

近世磁器 (Fig.25-21)

21は紅皿で、約1/2が残存する。口径4.6cm、器高1.7cm、底径1.4cmを測り、口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部は水平な面をなす。内面には透明釉を薄く施し、外面は一部を除き露胎である。

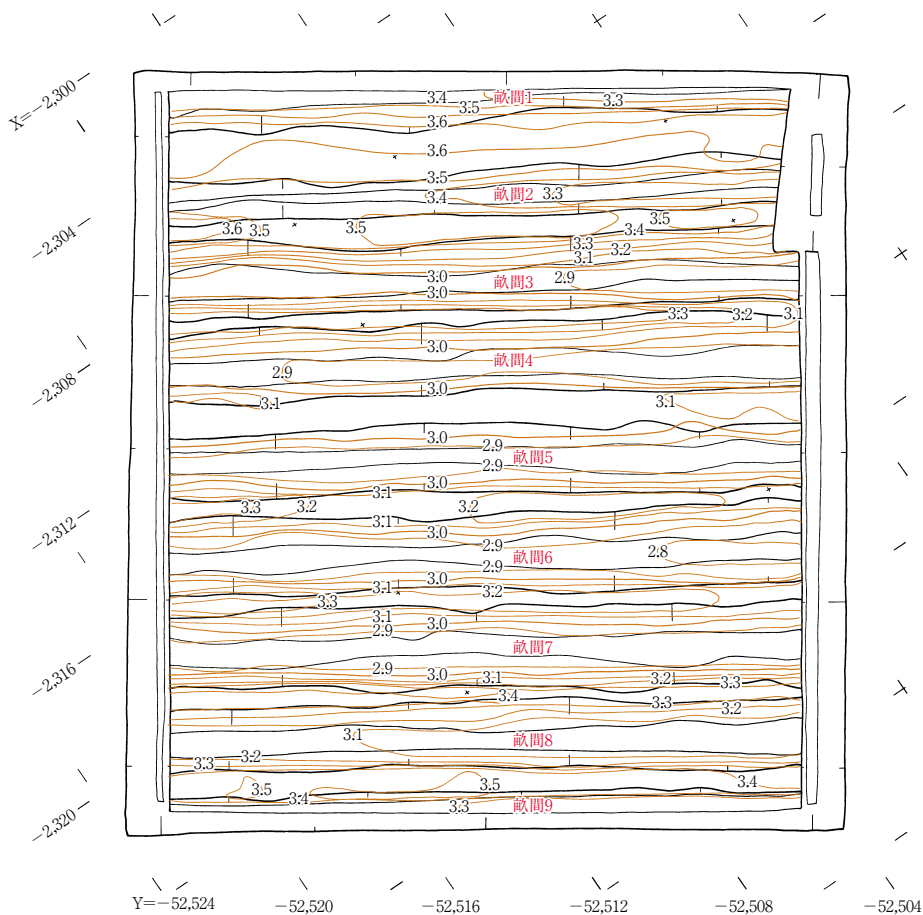


Fig.23 III区遺構平面図 (S=1/250)

近代磁器 (Fig.25-22)

22は碗で、ほぼ完存する。口径7.0cm、器高4.6cm、底径2.8cmを測り、高台は「ハ」字状に開く。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。器面全体には薄い透明釉を施し、畳付は露胎である。高台内には「岐197」と陽刻され、第二次世界大戦中に岐阜県内で生産されたものと考えられる。

畝間2

調査区北部で検出した畝間である。幅0.24～0.62mで、検出面は北(3.381m)から南(3.324m)に向かって緩やかに傾斜しており、21.40mを検出した。埋土は4層に分層され、1層(第Ⅷ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂、2層(第Ⅸ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、3層(第Ⅹ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、4層(第Ⅺ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂である。出土遺物には土師質土器片3点、土製品1点がみられ、土製品1点(23)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.25-23)

23は土錘で、完存する。全長6.0cm、全幅2.0cm、全厚1.8cm、孔径0.5cmを測り、調整は摩耗が著

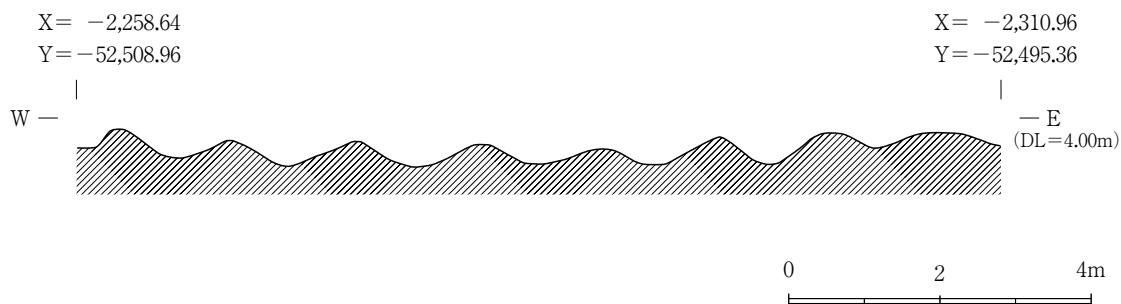


Fig.24 III区畝間エレベーション図 (S=1/100)

しく不明である。

畝間3

調査区北部で検出した畝間である。幅0.52~1.12mで、検出面は北(2.997m)から南(2.850m)に向かって傾斜しており、21.40mを検出した。埋土は6層に分層され、1層(第Ⅲ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂、2層(第Ⅳ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、3層(第Ⅴ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、4層(第Ⅵ層)がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、5層(第Ⅶ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、6層(第Ⅷ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルトである。出土遺物には土師質土器片18点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

畝間4

調査区中央部で検出した畝間である。幅0.48~1.04mで、検出面は北(2.924m)から南(2.856m)に向かって緩やかに傾斜しており、21.20mを検出した。埋土は6層に分層され、1層(第Ⅲ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、2層(第Ⅳ層)が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト、3層(第Ⅴ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、4層(第Ⅵ層)がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、5層(第Ⅶ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、6層(第Ⅷ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルトである。出土遺物は皆無であった。

畝間5

調査区中央部で検出した畝間である。幅0.54~0.96mで、検出面の標高は北端2.836m、南端2.816mとほぼ平坦で、21.20mを検出した。埋土は9層に分層され、1層(第Ⅲ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、2層(第Ⅳ層)が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト、3層(第Ⅴ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、4層(第Ⅵ層)がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、5層(第Ⅶ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト、6層(第Ⅷ層)が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト、7層(第Ⅷ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂、8層(第Ⅸ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、9層(第Ⅹ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂である。出土遺物は皆無であった。

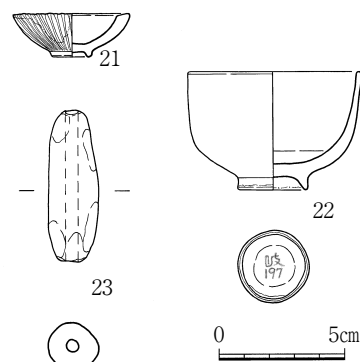


Fig.25 III区畝間出土遺物実測図 (近世磁器, 近代磁器など)

畝間6

調査区中央部で検出した畝間である。幅0.38～1.02mで、検出面の標高は北端2.876m、南端2.849mとほぼ平坦で、21.10mを検出した。埋土は9層に分層され、1層(第Ⅳ層)がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、2層(第Ⅶ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、3層(第Ⅷ層)が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト、4層(第Ⅹ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、5層(第Ⅺ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト、6層(第Ⅻ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、7層(第Ⅼ層)が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト、8層(第Ⅽ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、9層(第Ⅾ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルトである。出土遺物は皆無であった。

畝間7

調査区南部で検出した畝間である。幅0.56～1.22mで、検出面は北(2.864m)から南(2.735m)に向かって傾斜しており、21.20mを検出した。埋土は6層に分層され、1層(第Ⅶ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、2層(第Ⅹ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、3層(第Ⅺ層)がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、4層(第Ⅻ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト、5層(第Ⅼ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、6層(第Ⅽ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルトである。出土遺物には近代陶磁器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

畝間8

調査区南部で検出した畝間である。幅0.48～1.18mで、検出面は北(3.165m)から南(3.007m)に向かって傾斜しており、21.40mを検出した。埋土は7層に分層され、1層(第Ⅶ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、2層(第Ⅹ層)が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト、3層(第Ⅺ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、4層(第Ⅻ層)がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、5層(第Ⅼ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、6層(第Ⅽ層)がオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト、7層(第Ⅾ層)が暗褐色(10YR3/4)シルト質砂である。出土遺物は皆無であった。

畝間9

調査区南部で検出した畝間で、南側は調査区外に続く。確認された幅は0.16～0.38mで、検出面の標高は北端3.238m、南端3.214mとほぼ平坦で、21.10mを検出した。埋土は4層に分層され、1層(第Ⅶ層)が黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト、2層(第Ⅹ層)が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂、3層(第Ⅺ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂、4層(第Ⅻ層)が部分的に炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂である。出土遺物は皆無であった。

第 V 章 自然科学分析

1. 高知県，不破遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

(1) はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお，乾燥的な環境下の堆積物では，花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

一方，植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり，植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山，2000)。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山，1984)。

不破遺跡では，発掘調査において大畦状の盛り土が数本検出されたことから，これらが当時の水田に伴う遺構ではないかと推定された。

ここでは，大畦間の堆積土について花粉分析とプラント・オパール分析を行い，稲作をはじめとする農耕の可能性について検討する。

(2) 試料

試料は，TR-1(Ⅲ区)北壁より採取された堆積物7点である。上位より，にぶい黄褐色シルト質砂(XV層，試料①)，黒褐色砂質シルト(XVI層，試料②)，暗灰黄色シルト質砂(XVII層，試料③)，にぶい黄褐色シルト質砂(XVIII層，試料④)，オリーブ褐色砂質シルト(XIX層，試料⑤)，にぶい黄褐色シルト質砂(XX層，試料⑥)およびオリーブ褐色砂質シルト(XXI層，試料⑦)よりそれぞれ採取された。

(3) 花粉分析

① 方法

花粉粒の分離抽出は，基本的には中村(1973)を参考にして，試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後，0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理(無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液

を加え1分間湯煎)を施す。

5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm, 2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

② 結果

i 分類群

出現した分類群は、樹木花粉10, 草本花粉9, シダ植物孢子2形態の計21である。これらの学名と和名および粒数をTab.2に示す。なお、主要な分類群は写真(PL.23)に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

ツガ属, マツ属複雑管束亜属, スギ, ハンノキ属, クマシデ属-アサダ, クリ, シイ属, コナラ属コナラ亜属, コナラ属アカガシ亜属, ニレ属-ケヤキ

〔草本花粉〕

イネ科, タデ属, アカザ科-ヒユ科, ナデシコ科, アブラナ科, セリ亜科, タンポポ亜科, キク亜科, ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子, 三条溝孢子

ii 花粉群集の特徴

全体に花粉の検出数が非常に少なく, 試料②からは花粉は検出されなかった。試料①, 試料④はシダ植物孢子の出現率が比較的高い。試料①では樹木花粉のスギ, クマシデ属-アサダ等が出現し, 草本花粉はイネ科, アブラナ科, ヨモギ属等が出現する。試料④では草本花粉のタンポポ亜科, ヨモギ属等が出現する。

(4) プラント・オパール分析

① 方法

プラント・オパールの抽出と定量は, プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに, 次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身にのみ形成される)に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数(試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10^5 g)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94(種実重は1.03), ススキ属(ススキ)は1.24, ネザサ節は0.48である。

② 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ススキ属型、タケ亜科(ネザサ節型, その他)および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果をTab.3, Fig.26に示した。主要な分類群については顕微鏡写真(PL.24)を示す。

(5) 考察

XV～XVII層, XXI層, XXII層, XXIII層, XXIV層について分析を行ったが、いずれの試料からも花粉, プラント・オパールは低い密度でしか検出されなかった。したがって、この分析結果からでは植生および環境を推定することは困難である。なお、強いてあげるならば、XVI層とXXV層ではごく微量ではあるがイネのプラント・オパールが検出されていることから、これらの層の堆積時に調査地点の近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

花粉やプラント・オパールの密度が低いことの要因としては、1) 植物が生育していない環境であったこと, 2) 土層の堆積速度が速かったこと, 3) 堆積土の粒径が粗く(大きく), 花粉やプラント・オパールが雨水や地下水等によって流失したこと, 4) 花粉等の有機質遺体が分解されたこと, などがあげられる。ところで、本遺跡で採取された試料はいずれも砂質の強い堆積物であった。このことから、各層とも土層の堆積速度が速かったか、堆積土の粒径が粗いことにより微化石が流失してしまったことなどが考えられる。ただし、花粉等の有機質遺体は、土壤生成作用を伴う乾燥や乾湿を繰り返す堆積環境下では分解されることがあるため、あるいは各層の堆積時は比較的乾燥した堆積環境であったのかもしれない。

(6) まとめ

不破遺跡において花粉分析とプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、いずれの試料からも稲作跡の可能性を認め得るだけの花粉、プラント・オパールは検

Tab.2 高知県，不破遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度(単位：×100個/g)

分類群(和名・学名)	地点名 試料	Ⅲ区北壁						
		XV	XVI	XVII	XXI	XXIII	XXVII	XXIX
イネ科 Gramineae (Grasses)								
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)		5					5	
ススキ属型 <i>Miscanthus type</i>								5
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)								
ネザサ節型 <i>Pleioblastus sect. Nezasa type</i>		5				9	15	5
その他 Others			5		7	5		10
未分類等 Unknown		36	25	10	88	51	30	51
プラント・オパール総数		46	30	10	95	65	50	71

おもな分類群の推定生産量(単位：kg/m²・cm)

イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.15			0.15			
ススキ属型 <i>Miscanthus type</i>						0.06	
ネザサ節型 <i>Pleioblastus sect. Nezasa type</i>	0.02				0.04	0.07	0.02

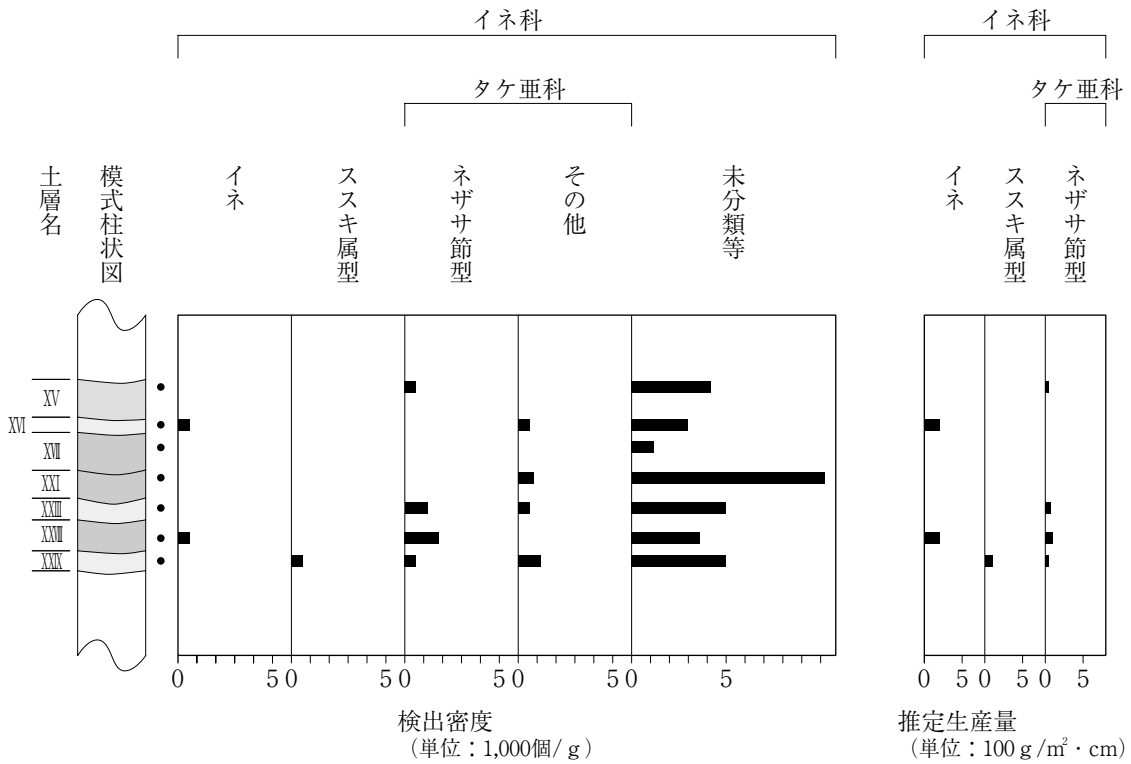


Fig.26 不破遺跡におけるプラント・オパール分析結果

Tab.3 不破遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	Ⅲ区 北壁Sec									
			Ⅳ層 試料①	Ⅴ層 試料②	Ⅵ層 試料③	Ⅶ層 試料④	Ⅷ層 試料⑤	Ⅸ層 試料⑥	Ⅹ層 試料⑦			
Arboreal pollen		樹木花粉										
<i>Tsuga</i>		ツガ属	1									
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	1									
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	2									
<i>Abies</i>		ハンノキ属	1									
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	2									
<i>Castanea crenata</i>		クリ	1									1
<i>Castanopsis</i>		シイ属	1		1							
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	1									
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属					1					
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ					1					
Nonarboreal pollen		草本花粉										
Gramineae		イネ科	3									
<i>Polygonum</i>		タデ属	1									
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科							2			
Caryophyllaceae		ナデシコ科							1			
Cruciferae		アブラナ科	3									
Apiodeae		セリ亜科	1				1					
Lactuoidae		タンポポ亜科	1		1		2			1		
Aateroideae		キク亜科					1					
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	2				4					1
Fern spore		シダ植物孢子										
Monolate type spore		単条溝孢子	17		6		53		7		5	
Trilate type spore		三条溝孢子	15	1	4		41		4		6	
Arboreal pollen		樹木花粉	10	0	1		2		1		0	1
Nonarboreal pollen		草本花粉	10	0	1		8		0		4	1
Total pollen		花粉総数	20	0	2		10		1		4	2
		資料1cm ² 中の花粉密度	1.6	0.0	3.0		1.1		1.4		3.0	1.4
		×10 ²	×10 ²	×10	×10		×10 ²		×10		×10	×10
Unknown pollen		未同定花粉	6	0	2		5		1		1	0
Fern spore		シダ植物孢子	32	1	10		94		11		11	0
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)		(-)		(-)		(-)	(-)
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)		(-)		(-)		(-)	(-)

出されなかった。したがって、本遺跡で検出された遺構が稲作に伴うものであることを積極的に肯定することはできない。

なお、花粉、プラント・オパールの検出密度が低いことから、土層の堆積速度が速かったか、微化石が流失してしまったことなどが考えられた。また、花粉等が分解されやすい比較的乾燥した堆積環境下であった可能性も示唆された。

文献

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本. 第10巻. 古代資料研究の方法, 角川書店, p.248~262.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70~83.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189~213.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, p.60
- 中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82~110.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187~193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21~30.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, p.91
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―. 考古学と自然科学, 9, p.15~29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―. 考古学と自然科学, 17, p.73~85.

2. 不破遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、不破遺跡で確認された畝状遺構内の堆積物、畝を構成する堆積物について、現地調査および軟X線写真撮影観察を行い、本遺構の形成期・形成後の調査区の土地利用状況に関する情報を得ることを目的としている。

(1) 調査地点の層序

調査区内で検出された畝状遺構の畝部分(1地点)と畝間部分(2地点)の2カ所を調査地点として設定し、層相観察・記載および試料採取を実施した(Fig.27)。以下に各地点の堆積層の特徴について記載する。

① 1地点

調査区西端で確認された畝部分に相当する。畝の上位を覆う堆積物はⅠ・Ⅱ層に区分される。Ⅰ層はシルト混じりの中粒～細粒砂からなる。人為的に擾乱され塊状をなす堆積物によって構成

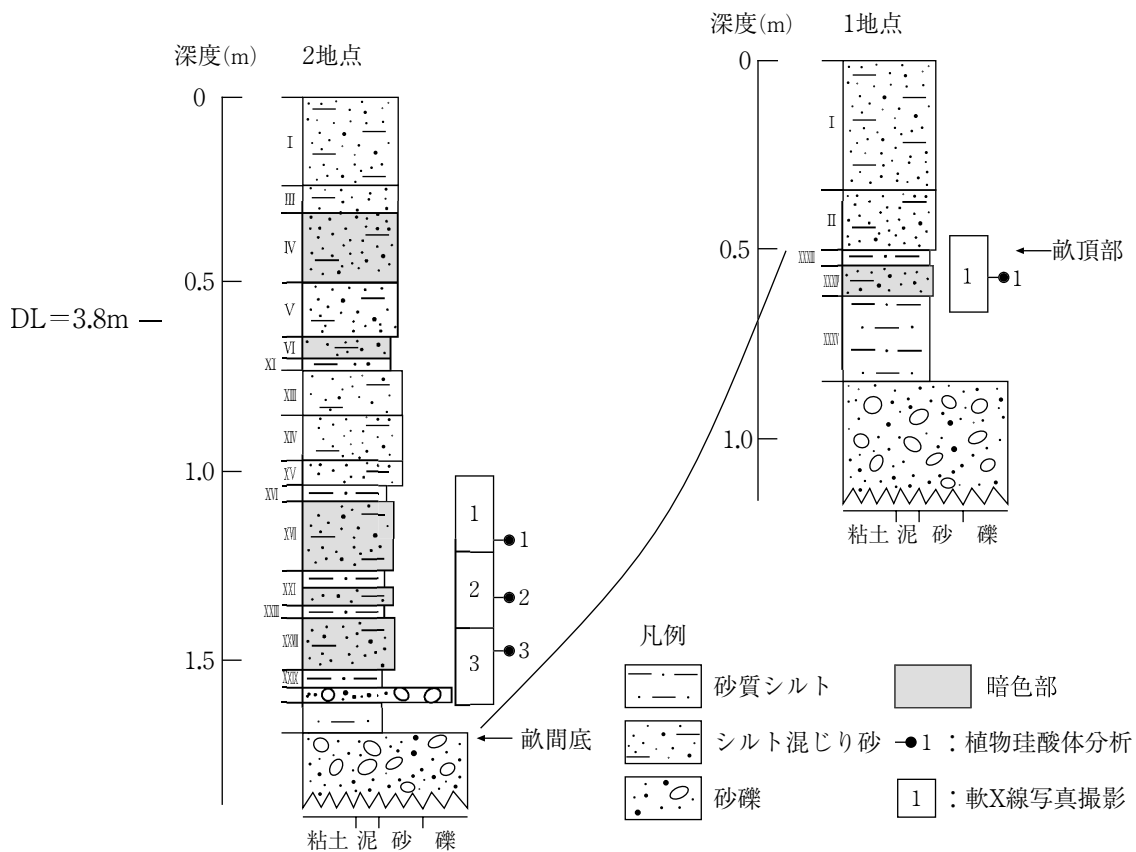


Fig.27 調査地点の層序および試料採取位置

されており、しまりが比較的悪く孔隙も多い。堆積層内には、酸化鉄および酸化マンガンの沈着が観察される。現在の耕作土である。II層は塊状をなす、淘汰の良い細粒砂からなる。側方へ級化することなどから河川の氾濫ないし洪水堆積物と判断される。

畝構成堆積物は3層に区分されている。XXXX層は細粒砂質シルトからなる。XXXX層は塊状をなすシルト混じり細粒砂からなる。擾乱されており孔隙も多い。XXXX層は塊状をなす砂質シルトからなる。植物根痕が認められる。XXXX層からXXXX層にかけての層相変化は連続しており、上方粗粒化する逆級化層と判断される。河川堆積物において逆級化層は、洪水堆積物に特徴的に認められる堆積構造である(増田・伊勢屋, 1985)。逆級化層において下部の泥層は氾濫初期の停滞した氾濫水下で、上部の砂層は氾濫中期に氾濫水の水深が増し、河岸沿いで生じる強い涌き上がりによって浮遊させられた砂が堆積したものとされる(増田・伊勢屋, 1985)。

XXXX層の下位には弱いトラフ型斜交層理をなす砂礫層が認められる。礫の大きさは15cm程度であり、基質は中粒砂～粗粒砂からなる。層相から流路堆積物と判断される。

② 2地点

本地点は畝間部分に位置する。深度1.2m層準のXX層より上位の堆積物は、調査区西部の畝の上位を覆う堆積物であり、それより下位の堆積物が畝間を充填する堆積物である。畝間を充填する堆積物は、砂質シルト層からシルト混じりの細粒砂層へと上方粗粒化する逆級化層のセットの累重からなる。これらの堆積物は、上述の逆級化層の特徴から、洪水堆積物と判断される。各逆級

化層の上部は生物擾乱が及んでおり、孔隙が発達する層準も認められる。このような堆積状況は、基本的には全ての畝間で同様である。畝を覆うⅧ層より上位の堆積物も基本的には逆級化層の累重と考えられるが、擾乱されているため不明瞭となっている。

(2) 試料

試料は、1地点および2地点の堆積断面から柱状試料として採取した。試料は室内に持ち帰り、軟X線写真撮影観察試料と植物珪酸体分析用試料を分けて採取した。植物珪酸体分析は擾乱されている層準を中心に実施した (Fig.27)。

(3) 分析方法

① 軟X線写真撮影観察

土層断面より採取した柱状ブロック試料から、幅7cm、長さ20cm、厚さ1cmの板状の試料をプラスチックケース内に分離、成形して軟X線写真の撮影を行った。撮影はニッテツ・ファインプロダクツ釜石文化財保存処理センター

の協力を得た。軟X線写真については、土壤の基本的構造である粒団(ベッド)や粗孔隙ないし間隙(写真で黒く表現されている部分)の形状や分布に着目して堆積物の微細な堆積構造の記載を行った。記載にあたっては、『土壤薄片記載ハンドブック』(久馬・八木訳監修, 1989)を参考とした。粗孔隙と間隙の用語については、成岡その他(2000)に従い、粗孔隙が土の乾燥収縮、植物根の腐朽跡あるいは地中動物の通行跡などに相当し、面状や管状などの構造単位の特定が可能な亀裂や管状孔隙に、間隙が粗孔隙を含むすべてのスキ間に対して使用している。

② 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞

Tab.4 植物珪酸体分析結果(個数)

種類 試料番号	1地点		2地点	
	1	1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	2	11	1	8
タケ亜科ネザサ節	1	15	-	9
タケ亜科	-	57	6	55
ヨシ属	6	13	4	4
ウシクサ族コブナグサ属	2	2	1	5
ウシクサ族ススキ属	1	17	2	14
イチゴツナギ亜科オオムギ族	2	1	1	-
イチゴツナギ亜科	4	8	1	3
不明キビ型	21	55	5	38
不明ヒゲシバ型	3	22	1	14
不明ダンチク型	8	12	1	8
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	-	5	2	8
タケ亜科ネザサ節	-	8	2	12
タケ亜科	-	15	1	23
ヨシ属	1	4	2	1
ウシクサ族	7	6	1	1
不明	4	7	1	3
樹木起源				
第Ⅲグループ	36	38	15	26
第Ⅳグループ	2	3	2	3
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	50	213	23	158
イネ科葉身機動細胞珪酸体	12	45	9	48
樹木起源	38	41	17	29
総計	100	299	49	235

に由来した植物珪酸体(以下, 短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下, 機動細胞珪酸体と呼ぶ)を, 近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には, 分析試料の乾燥重量, プレパラート作成に用いた分析残渣量, 検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し, 堆積物1gあたりの植物珪酸体含量を求める。

結果は, 検出された植物珪酸体の種類と個数の一覧表, 植物珪酸体含量の一覧表で示す。また, 各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために, 植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

(4) 結果

① 軟X線写真撮影観察結果

軟X線写真をPL.26~29に示す。軟X線写真の観察結果については, 植物珪酸体分析結果を合わせ, 考察の稿で述べる。

② 植物珪酸体分析

結果をTab.4・5, Fig.28に示す。各試料から検出された植物珪酸体の保存状態は悪く, 表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。各地点の産状を以下に述べる。

i 1地点

試料1は, 植物珪酸体含量が558個/gである。栽培植物であるイネ属は短細胞珪酸体が検出され, その含量は11個/gである。また, オオムギやコムギなどの栽培種を含む分類群であるオオムギ族の短細胞珪酸体も検出されるが, その形態からは栽培種か否かの判別が困難である。このほか, ネザサ節を含むタケ亜科, ヨシ属, ススキ属を含むウシクサ族, イチゴツナギ亜科などが検出さ

Tab.5 植物珪酸体含量(個数/g)

種類 試料番号	1地点		2地点	
	1	1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	11	73	6	41
タケ亜科ネザサ節	6	100	0	46
タケ亜科	0	381	37	281
ヨシ属	33	87	25	20
ウシクサ族コブナグサ属	11	13	6	26
ウシクサ族ススキ属	6	114	12	71
イチゴツナギ亜科オオムギ族	11	7	6	0
イチゴツナギ亜科	22	53	6	15
不明キビ型	117	367	31	194
不明ヒゲシバ型	17	147	6	71
不明ダンチク型	45	80	6	41
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	0	33	12	41
タケ亜科ネザサ節	0	53	12	61
タケ亜科	0	100	6	117
ヨシ属	6	27	12	5
ウシクサ族	39	40	6	5
不明	22	47	6	15
樹木起源				
第Ⅲグループ	201	254	92	133
第Ⅳグループ	11	20	12	15
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	279	1,422	141	806
イネ科葉身機動細胞珪酸体	67	300	54	244
樹木起源	212	274	104	148
総計	558	1,996	299	1,198
乾燥重量(g)				
	11.942	9.983	10.840	13.066
検鏡時の総個数(個)				
	100	299	49	235
沈殿管定容量(ml)				
	1.000	1.000	1.000	1.000
プレパラート作成量(ml)				
	0.015	0.015	0.015	0.015

れ、その含量は数十個/g程度である。なお、不明キビ型の形態は、ススキ属の短細胞珪酸体に類似する。

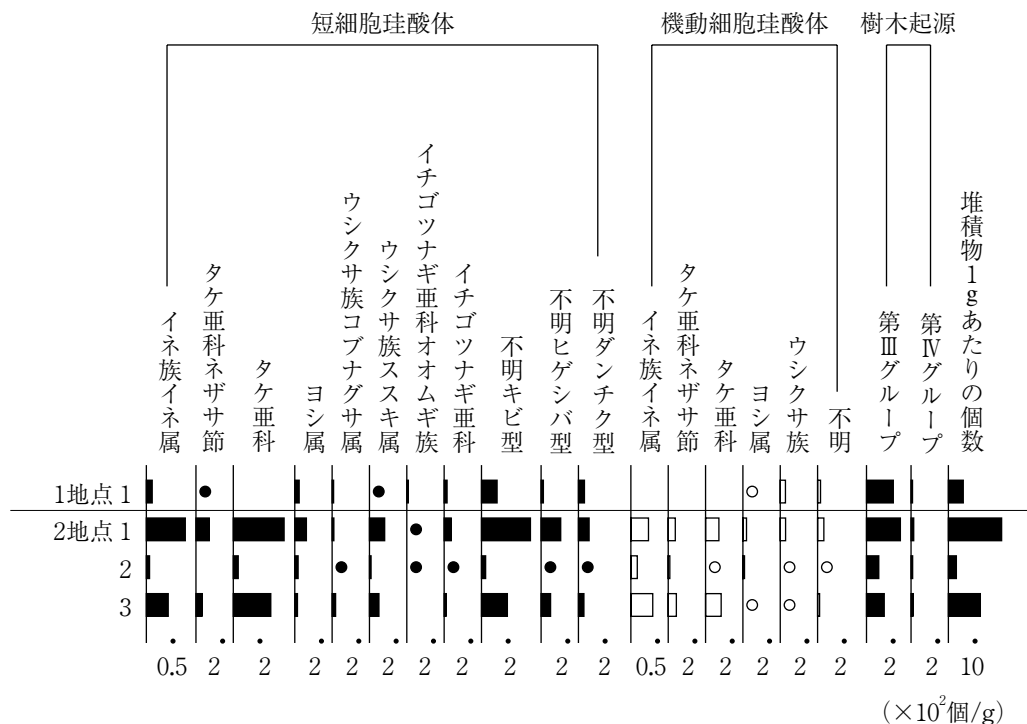
また、樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループ(近藤・ピアスン, 1981)が検出され、第Ⅲグループの産出が目立つ。第Ⅲグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈し、大部分の樹木葉部に観察される。第Ⅳグループは網目模様の付いた紡錘形を呈し、第Ⅲグループと同様に大部分の樹木葉部で観察される。

ii 2地点

植物珪酸体含量は、中位の試料2で299個/gと少ないが、下位の試料3で約1,200個/g, 上位の試料1で約2,000個/gである。いずれの試料からも栽培種のイネ属が検出されるが、その含量は数個～数十個/g程度である。また、試料2で少ない。また、試料1・2ではオオムギ族の短細胞珪酸体もわずかに認められる。このほか、1地点と同様にネザサ節を含むタケ亜科, ヨシ属, ススキ属を含むウシクサ族, イチゴツナギ亜科などが検出され、この中ではネザサ節を含むタケ亜科の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の産出が目立つ。また、樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループも検出され、1地点と同様に第Ⅲグループの産出が目立つ。なお、試料1・3では水生珪藻とおもわれる珪藻化石が多産する。

(5) 考察

今回の各分析結果に基づいて、畝状遺構が形成されているベースとなる堆積物の時期、畝状遺



堆積物1gあたりに換算した個数を示す。この図では、イネ属を強調して図化している。なお、●○は10個未満の種類を示す。

Fig.28 植物珪酸体含量

構が形成後に畝間に堆積した堆積物の時期における調査地点の土地利用状況に関する考察を行う。

① 畝状形成以前の時期

1地点の畝を構成する堆積物の軟X線写真をPL.26に示した。写真上部の層準Aが畝上面に相当する。層準Aより上位の堆積物は塊状の細粒砂からなる。直径8mm程度の粒団が形成されている(拡大写真A)。本層は氾濫ないし洪水堆積物と判断されるが、堆積後には土壤の発達が行われるような堆積環境になったことが推定される。

層準Aより下位の畝構成堆積物には層準Bで不明瞭な層界が認められる(拡大写真B)。層準Bより下位のXXXX層・XXXX層は、上方粗粒化する堆積物からなり、XXXX層は擾乱されている。両層には植物痕に由来するとみられる粗孔隙が認められる(拡大写真C・B)。層準Cより下位層準では粗孔隙の密度が高くなる。また、XXXX層の上位のXXXX層も粗孔隙が認められた。これらの粗孔隙は堆積後に形成されたものであり、特にXXXX層に覆われている、XXXX層については氾濫堆積後に土壤の発達が行われるような堆積環境となったことが推定される。

XXXX層における植物珪酸体の産状は、植物珪酸体含量が558個/gと少なかったが、栽培植物であるイネ属は短細胞珪酸体やオオムギやコムギなどの栽培種を含む分類群であるオオムギ族の短細胞珪酸体などが検出された。これらの植物珪酸体は氾濫堆積時に集水域よりもたらされたものである可能性が高いが、土壤の発達が短期間にせよ行われたことを考慮すると、当時の調査地点周辺に分布していた可能性も考える必要がある。

② 畝状遺構形成後の畝間充填の時期

2地点の畝間を充填する堆積物のうち、XV層より下位堆積物の軟X線写真をPL.27～29に示す。XV層以下の堆積物は淘汰の良い細粒砂～砂質シルト層によって構成されている。このうち、細粒砂層のうち、層準B～Cの層位には塊状をなす直径5～10mm程度の粒団が発達する(拡大写真G・H・I)。本層準で認められる粒団は、安定した地表面となり、植物が着生して土壤化作用が行われた結果、発達および形成されたものであると考えられる。このような構造は耕作土の特徴にも類似する(松田, 1996)。また、層準E～F、層準G～Hの細粒砂層の層準でも粒団の発達が確認される(拡大写真K・O・N)。これらの層位の粒団は層準B～Cのような粒団ではなく、粒団間の間隙が未発達な接合をしている状況にあるものであった。これらの層位の構造も、堆積後に土壤化作用が行われたことにより形成されたものと判断されるが、その形成期間は短期間であった可能性が高い。また、砂質シルト部分は、いずれの層位も間隙あるいは植物痕に由来するとみられる粗孔隙が存在するものの、粒団の発達には至っていない。先述したように、これらの堆積層は逆級化層をなす洪水堆積物からなることから、単層下部には土壤化の影響が及ぶことが少なかったことを示しているものと思われる。このような堆積物の層相から、畝間に累重するXIV層までの砂質シルト～細粒砂層は、土壤発達が行われるような堆積間隙を挟在しながら累重していった洪水堆積物であることが推定される。

土壤発達が行われたと推定される層準からは、栽培植物のイネ属が検出されている。ただし、その含量は少なかった。過去の水田堆積物における機動細胞珪酸体の含量密度は、1gあたり5,000個を越えている例が多い(古環境研究所, 1993; 1994など)。この調査例と比較すると、今回の植物珪

酸体含量は非常に少ないことになる。上記した土壌の発達期間の存在を考慮すると、周辺にイネが存在したことを検討する必要がある。耕作土に含まれるイネ属珪酸体は、その場での栽培のみを示すものでなく、畑地の畝などの被覆資材や水田や畑などに肥糧用として鋤込まれる異地性の稲わらや籾殻などのイネ植物体についても想定する必要がある。今回の畝間堆積物では、特に粒団の発達が顕著で耕作土の可能性のある層準B~Cの層位について同様なことが想定される。

以上の調査結果から畝間堆積物には土壌の発達が行われる期間が存在することが確認された。このような土壌形成期間中は人間の活動の場となり得るものであり、本遺構構築後の土地利用を考える上で意義のある結果といえる。また、土壌の発達層準の中に耕作土に類似する層準が認められたが、その層準は最初に畝を覆う堆積物の時期であった。この段階は畝状の起伏は残っており、水田としての利用は考えにくく、畑地耕作土として利用していた可能性が考えられる。

引用文献

- 久馬一剛・八木久義(1989) 土壌薄片記載ハンドブック, 博友社, p.176
- 近藤鍊三・ピアスン友子(1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について, 帯広畜産大学研究報告, 12, p.217~229
- 近藤鍊三(1976) 樹木起源の珪酸体について, ペドロジスト, 20, p.176~189
- 近藤鍊三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, p.31~64
- 増田富士夫・伊勢屋ふじ子(1985) “逆グレーディング構造”: 自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造, 堆積学研究会会誌, 22・23, p.108~116
- 松田順一郎(1996) 「北島遺跡の耕作地と古環境—寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書—」, (財)東大阪市文化財協会, p.157
- 成岡 市(1992) 土壌粗孔隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前線. 日本土壌肥糧科学雑誌, 64-1, p.90~97
- 成岡 市・岩田幸良・駒村正治(2000) 関東ローム層土における粗孔隙の透水, 通気および排水機能. 農業土木学会論文集, No.208, p.63~71
- 杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料—として—. 考古学と自然科学, 19, p.69~84
- 徳永重元・山内輝子(1971) 花粉・胞子, 「化石の研究法」, p.50~73, 共立出版株式会社
- 株式会社古環境研究所(2001) 自然科学分析調査報告書—高知県, 不破遺跡—

第Ⅵ章 中村市不破遺跡の層序

那須孝悌(大阪市立自然史博物館館長)

発掘地の地形

平成14年度に発掘調査が行われた高知県中村市不破遺跡のⅡ区およびⅢ区確認トレンチは不破集落の東南、四万十川左岸の氾濫原内に位置する。発掘地点は穿入曲流する四万十川が大きな弧を描いて左にゆるく蛇行する凸岸側の蛇行滑走斜面上に位置している。発掘地およびその周辺は農耕地として開発されているため、滑走斜面に形成される小段丘崖群や蛇行州の氾濫原堤のような微地形は現在では観察されない。

遺構

発掘地では現地表面の下20～30cmに、現在の川岸線にほぼ並行する等間隔の溝・畝状遺構が検出された。被覆層は川岸に近い場所ほど厚い。溝・畝の間隔は2.1～2.5m、溝の深さは0.40～0.53m、畝状部は川側が緩く山側が急な非対称断面形をしており、川側斜面の傾斜は4～6/10、山側斜面の傾斜は5～9/10であった。

溝状部分の地層

02-5NFⅡ区北壁セクション(Fig.11)において観察された地層の層相を上位より順次記述する。

- I層：灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト層。堆積構造は認められないが、層理面と直交する方向に伸びる細根状の細かな酸化鉄斑を有する。発掘地の全域を覆い層厚約10cm。
- II層：灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト層。やや粗い植物根状の酸化鉄斑を有し、木炭の細片および小礫が稀に含まれる。発掘地全域に分布し、厚は5～10cm。
- III層：灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト層。酸化鉄斑を含む。上位のII層との間は層相が漸移し、境界の層理面は不明瞭。発掘地の全域に分布するがところどころでせん減欠如し、層厚は5～2cm。
- Ⅳ層：褐色(7.5YR4/3)砂層。下部は極細粒砂であるが上方粗粒化(逆級化)して上部は細粒砂。最上部に粘土質シルトの偽礫を含む。酸化マンガン斑を多く含む。細いサンドパイプおよびシルトパイプが多く認められるが、パイプ内充填物は酸化鉄および酸化マンガンによる汚染が少ない。溝状部の中に分布し層厚は約5cmであるが溝によっては層厚16cmに達するところもある。
- Ⅴ層：灰色(5Y6/1)砂質シルト層。酸化マンガン斑および酸化鉄斑を少量含む。径12～30mmのサンドパイプを有する。層厚は4～10cm。
- Ⅵ層：にぶい褐色(7.5YR5/3)細粒砂層。粘土質シルトの偽礫を含む。マンガン斑を含むが斑状部以外も全体に酸化マンガンにより汚染されている。溝内の川に近いほうに偏在して川岸側に向かって殲滅する分布を示す例があり、最大層厚は約15cm。
- Ⅶ層：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト層。極薄い粘土質シルト層と極細粒砂層の細互層。層厚

は2～9cm。

Ⅺ層：にぶい褐色(7.5YR5/3)細粒砂層。所により基底部に黄白色シルト薄層が見られる。最下部には細礫(稀に最大径3cmの中礫を含む)およびシルトの偽礫が含まれる。全体に酸化マンガン斑と酸化鉄斑を含むが、酸化マンガン斑のほうが多い。溝内の川側に分布し層厚は最大8cm。

Ⅻ層：にぶい褐色(10YR5/3)粘土質シルト層。薄い淡灰色粘土層と灰色極細粒砂層の細互層。酸化鉄斑および酸化マンガン斑がわずかに認められ、稀に石炭の小破片を含む。溝内の川側に分布し最大層厚は10cm。

Ⅼ層：にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルト層。淡褐色シルトと灰色極細粒砂とのブロック状混合層。チャートの細～小礫を少し含み、石炭の小破片が混じる。溝内の川岸側に分布し最大層厚は18cm。

Ⅽ層：溝状遺構の地山を成す地層で、灰黄色(2.5Y6/2)の砂質シルトを基質とする中～大礫層。礫は砂岩を主体としチャートや泥岩を含む。最大礫径約10cm。真の層厚は不明であるが、約30cm以上。

畝状部分の地層

畝状遺構の頂部は礫層によって形成されるが、礫層の厚さは一定ではなく10～30cmと変化に富む。礫の一部は畝状遺構の斜面を甸甸降下し溝下底に続くが、一部は分かれてⅧ層下部に挟まれて殲滅する。また、礫層内の内、頂部近くには礫の間隙に基質堆積物がなく人為的な再移動を受けていると思われる部分がある。

なお、畝状遺構の斜面にはところどころに円磨を受けていない(角礫状の)石炭がある。

所見

非対称山稜のような断面形態をした多数の直線上の並行する畝と、それによって形成される異なる傾斜角の斜面を持つ溝は、エキスカベーターと呼ばれたという機械による掘削の結果形成されたものであろう。水田として利用されている現在の地表面から遺構面までの地層はわずかに20～25cmしかなく、地層も脱水圧密をほとんど受けていないことから極めて新しい時代の遺構であろうと推測される。

四国地方には徳島県の勝浦炭田(下部白亜系物部川層群)や愛媛県の久万含炭地(上部始新統久万層群)のような炭田もあるが、四万十川上流の集水域には石炭が露出しているような地層が分布していないことを考慮すれば、畝や溝の表面に散在する石炭は掘削または運搬用動力の燃料として利用された石炭がこぼれ落ちたものと考えられる。

畝の頂部が礫層であることを考えれば、掘削後の土地利用は畝を対象としたものではなく、溝内の堆積物を対象としたものと考えられる。しかし溝内堆積物の多くが増水期の洪水堆積物であるため、利用環境は極めて不安定なものであったであろうし、ごく一時的な利用に過ぎなかったであろう。酸化鉄斑や酸化マンガン斑の存在が認められることは灌漑水田のような状況だったと思われるが、酸化鉄や酸化マンガンの沈着量が少なく斑紋の密度が低い事は、利用期間が極めて短期であったことを窺わせる。

第Ⅶ章 考 察

1. 畝状遺構及び畝間について

本調査では近代の畝状遺構及び畝間を確認した。Ⅱ区では13条，Ⅲ区では8条の畝状遺構と畝間を確認している。この畝間の埋土は基本的に砂層を主体とする堆積であったが，土層の断面観察において耕作が行われたとみられる層位がⅡ区で1層，Ⅲ区で3層確認されており，少なくともⅡ区では1面，Ⅲ区では3面の耕作面の存在が考えられる。Ⅲ区で確認された耕作が行われたと考えられる層位の間には洪水によって堆積したと考えられる砂層が認められ，冠水したことが推測される。自然科学分析では，耕作が行われたと考えられる層位において酸化鉄斑・酸化マンガン斑や直径5～10mm程度の塊をなす粒団の発達を確認されている。これは植物が着生して土壤化作用が行われた結果であるとみられ，本調査区で検出された耕作面において何らかの栽培が行われたことを裏付けるものと考えられる。

Ⅱ区では調査において耕作が行われたと考えられる層位は1層のみであったが，自然科学分析では前述した酸化鉄斑や酸化マンガン斑が認められる層位が畝間を埋める多くの堆積層で認められている。このことから，本調査で確認された層位だけではなく砂質が比較的強い堆積層でも耕作が行われた可能性も考えられる。

Ⅲ区では調査において耕作が行われたと考えられる層位が3層(第Ⅲ層，第Ⅳ層，第Ⅴ層)確認されており，3面の耕作面が存在している。これらの層位では自然科学分析によって粒団の発達が認められており，このことは同層位における耕作を裏付けるものと考えられる。また，これらの層位では植物珪酸体分析によって栽培植物であるイネ属が検出されている。このイネ属珪酸体は，畑の畝などの被覆する稲藁や水田・畑などに肥料用としてすき込まれる稲藁・籾殻によって持ち込まれることも考えられるが，前述したように同層位において土壤化作用が行われたことを考慮すれば，周辺にイネが存在した可能性も考えられる。このような土壤形成期間は人間活動の痕跡となり得るもので，Ⅱ・Ⅲ区とも畝間において耕作が行われた可能性は高いと考えられる。

また，Ⅲ区においては畝間だけではなく，畝状遺構の頂部においても耕作の可能性が自然科学分析によって指摘されている。基本的に畝状遺構を構成する堆積層も畝間の埋土と同様に洪水堆積物と考えられるが，第Ⅲ層・Ⅳ層においては植物痕に由来するとみられる粗孔隙が確認されている。この粗孔隙は堆積後に形成されたものであり，土壤発達が行われた可能性が考えられる。また，第Ⅳ層からはイネ属やオオムギ属などの植物珪酸体が検出されている。これは堆積時に周辺からもたらされた可能性も否定できないが，土壤発達が行われたことを考慮すると，周辺に分布していた可能性も考えられる。しかし，この土壤発達が畝状遺構の形成後かあるいは，形成される以前のものなのか遺物が出土しておらず判然としない。また，Ⅱ区の畝状遺構は円礫で構成されており，畝状遺構の頂部で耕作が行われたとは考えにくい。

このように本調査区では耕作が行われていたと考えられるが，Ⅲ区において耕作面の間に砂が

堆積していることや各層位が洪水堆積層で構成されていることなどからみても耕作地としての利用期間は極めて短かったと考えられる。掘削工事によって生じた畝間における耕作は不便なものであったと考えられるが、本調査で確認された耕作面は荒れ果ててしまった土地における人々の努力の痕跡とみられる。

なお、現地でのお話によると、掘削工事のあと、これらの畝間において夏季はサトウキビやサツマイモ、冬季はムギを栽培していたことや、一部ではサトウキビの代わりに桑を植えていたことを伺っている。サトウキビやサツマイモは自然科学分析では検出されにくく今回の分析では確認されなかったが、ムギについては微量であるが検出されている。このことから、現地で伺ったお話は自然科学分析の結果を裏付けるものと考えられる。

2. 遺物について

本調査において出土した最古の遺物は、Ⅲ区の第ⅩⅩⅩ層から出土した古代の土師器杯蓋(20)である。この土師器杯蓋は摩耗が著しく調整不明であるが、天井部が扁平なことなど形態的な特徴から8世紀末～9世紀初めのものと考えられる。第ⅩⅩⅩ層は1～10cmの円礫で構成される層位で、土師器杯蓋は流れ込みと考えられるが、出土状態などから本調査区周辺から流れ込んだものとみられ、不破遺跡周辺に当該期の遺跡が存在する可能性が考えられる。

また、今回の調査で出土した遺物の多くは近代のものであるが、Ⅲ区の畝間1の堆積層から出土している磁器碗(22)が唯一明確な時期を判断できるものである。22の高台内には「岐197」と記されており、第二次世界大戦中に岐阜県内で生産されたものと考えられる。この番号は戦時中窯元に県単位で付けられ、国家による統制が行われたことを示すもので、戦時中の状況が垣間みられる遺物である。この磁器碗は畝間1の底近くから出土していることから戦時中には本調査区付近の掘削工事は終了していたと考えられる。

第Ⅷ章 まとめ

1. はじめに

不破遺跡で確認された遺構は、最終的に昭和の初めに行われた掘削工事の後にできた畝状地形を利用した耕作跡との結論に至った。そして、耕作物としては自然科学分析で検出し難い、サトウキビとサツマイモおよび麦であったこと^①を今年になって古老から聞くことができた。

試掘調査の段階では、検出面が深い部分で地表下1.2mほどあり、畝間からは砂層を挟んで灰色を基調とする3層のシルト混じりの堆積が確認され、田村遺跡群の水田跡(廣田 1986)のそれとは異なるものの擾乱され塊状をなす土層の状況は類似しており、何らかの耕作の痕跡であるものと推測された。ただし、耕作土の色調が灰色を基調としていることから比較的新しい時期の可能性も十分考慮されたが、数は少ないものの土錘や土師質土器片が出土したことから場合によっては中世頃まで遡るのではないかと考えた。また、耕作土であることを確認するため土壌分析を古環境研究所に依頼したが、それを傍証するには至らなかった。

一方、かつて入田地区など対岸の築堤工事のために不破地区の土砂が掘削されたことは聞いており、現況でⅠ区(標高約7.0m)に比べ、Ⅲ区(標高約4.0m)が3.0mほど低くなっていることが、掘削の結果であろうと思われた。また、牧草地となっているⅢ区は耕作者によると昭和30年代以降現況のままであるとの話もあり、本発掘調査を実施するまで畝状地形が昭和の初めに行われた掘削工事の痕跡であるとは俄に信じ難いものであった。

2. 不破遺跡

不破遺跡は、昭和48年度に文化庁が全国調査の一環として行った遺跡分布調査から遺跡台帳に記載された遺跡で、詳細は不明であるものの、土師質土器、備前焼を始め土錘が多く表採されていることから鎌倉時代から室町時代の集落跡の可能性のある遺跡とされ、その範囲は県道山路中村線を挟み東西約500m、南北約100mに広がっている。

この不破地区には、旧県社で、応仁2(1468)年応仁の乱を避けて中村に下向した一条教房(兼良の子)が山城国石清水八幡宮を勧請して幡多荘の総鎮守としたといわれる(山本 1986)不破八幡宮があり、本殿は国重文に指定されており、神事は市無形文化財、同社所有の幸徳秋水絵馬・中村俚人筆絵馬および中世古文書は市文化財となっている。また、周囲の小字(ホノギ)には、「土居ノ下」、「門屋敷」、「古屋敷」、「東屋敷」、「船戸」などがみられ、南にはかつて中村の船着場としての役割を担っていたといわれる角崎地区^②もあり、中世段階には少なからず人の往来があったものと考えられる。

一方、試掘調査^③では、近世以降とみられる水田面は確認できたものの、集落跡と判断される遺構は検出されていない。

このように、不破遺跡では、中世以降の集落の存在が推測されるも、発掘調査では集落跡を示す資料は発見されておらず、かつ、河川敷となっている標高約5.0m以下の部分については古代^④から

昭和初めまでの堆積の大半が前述の工事によって掘削されたものとみられることからこの間の遺構は遺存していないものと考えられる。

3. 掘削時期と耕作期間

不破の掘削工事は、昭和4年から14ヵ年継続工事として着工された渡川(四万十川)改修工事(建設省 1970)の一環として昭和8年から始まり、遺跡範囲が掘削工事に着手されたのは昭和9年からで、昭和11年にⅢ区付近、昭和17年にⅡ区付近が竣工している。

Ⅲ区にⅡ区より2枚多い耕作面が認められたのは、6年竣工時期が早かったためと考えられ、Ⅲ区の第Ⅷ層(第1耕作土)と第Ⅸ層(第2耕作土)は昭和12年から昭和17年の間の耕作面と言えよう。この間の洪水の状況をみると5m以上水位^⑧の上昇があったのは昭和12年9月1日の8.00m、昭和13年7月28日～8月2日の8.35m、昭和14年10月16日の5.32m、昭和15年9月11日の7.50m、昭和16年10月1日の8.00m、昭和17年9月21日の8.10mの6回である。なお、昭和11年には5m以上水位が上昇した洪水は記録されていない。これらからまず、第2耕作土が埋まったのは昭和17年の洪水ではなかろうか。第1耕作土との間には多い所で5層の間層がみられることから第1耕作土は昭和12年からの耕作面で、遅くとも昭和16年には埋もれたものとみられる。これらからすると第1耕作土の耕作期間は長くとも4年間、第2耕作土は2年間程度ではなかろうか。

それ以降の洪水は、昭和18年7月24日の9.45m、同年9月20日の8.10m、昭和19年9月11日の5.10m、昭和20年9月17日の8.25m(枕崎台風)、同年10月10日の6.82m(下流対岸の坂本での水位、阿久根台風)、

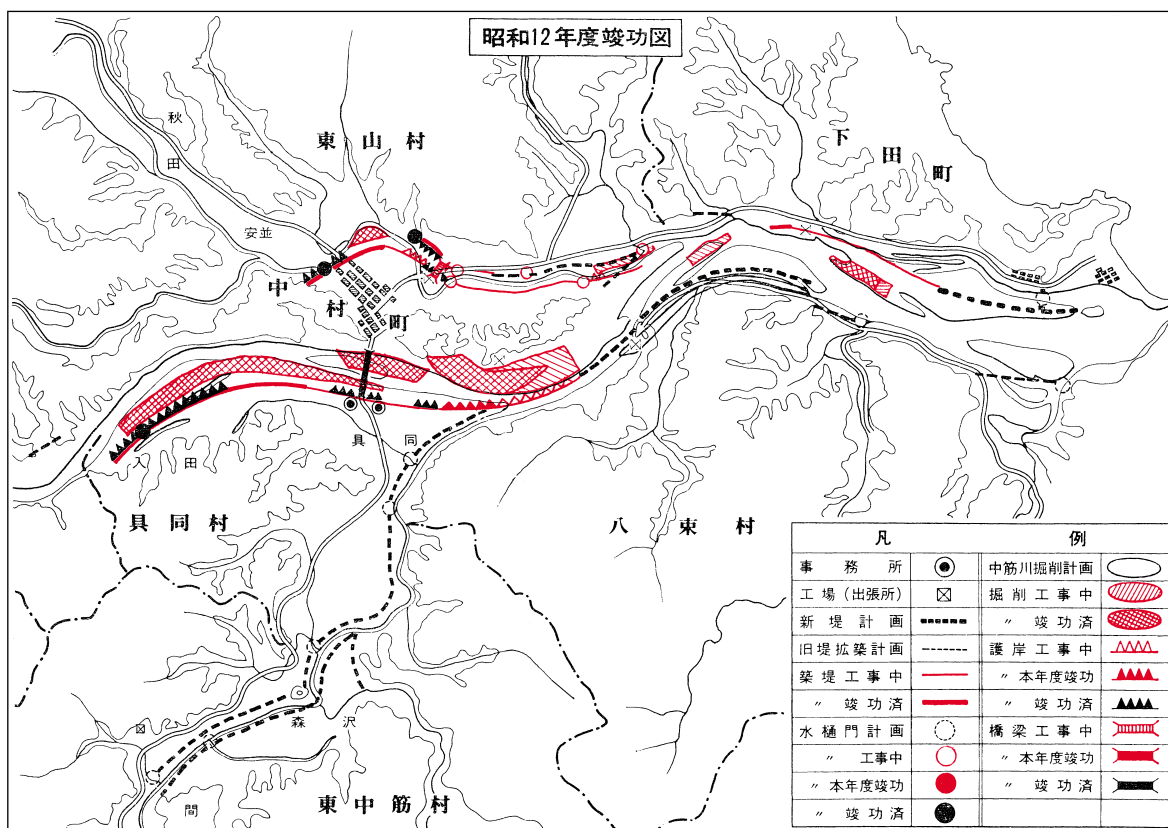


Fig.29 渡川改修工事昭和12年度竣工図(『渡川改修四十年史』1970より)

昭和21年7月29日の9.80m, 昭和23年8月26日の7.20mと毎年のように続く。Ⅲ区では表土層と第Ⅷ層(第3耕作土)との間に9層の間層がみられること, 昭和30年代から現況とほぼ変わらないことおよび昭和22~23年に撮影された米軍の航空写真に明瞭な耕作物が写っていないことから考えて, 第3耕作土は他の2層に比べ幅が厚く, 耕作期間がいちばん長いようにみられるものの昭和21年頃には洪水で埋まっていたのではなかろうか。換言すれば第3耕作土の耕作期間は長くとも4年間程度ではなかろうか。

いずれにしても, 地質学的所見, 自然科学分析で結論付けられているように耕作期間は短期間であったといえよう。

4. 畝状地形の成因

一言で言えば“ラダエクスカベーター”(Fig.30)による掘削痕跡となるが, 写真に残る掘削面はいずれもほぼ平らで, 今回のような畝状地形の記録写真を見出すことができなかった。

そこで, 掘削の方法を復元してみると, 河川に沿って, まず, 河川側にFig.30に見られるようなラダエクスカベーター用のレールと土砂を運搬する木炭機関車用のレールを併設した上で, 土砂を掘削しながら移動して行き, 順次レールを山側に移し, 掘削して行ったものと考えられる。

畝状地形の頂部が約1.6m間隔となっているのは, ラダエクスカベーターの移動間隔を示しているのであろう。

畝状地形は, 掘削の過程で, まず機械側に法面ができ, レールを移設して掘削した際には機械先端側に残土が生じた結果ではなかろうか。畝状地形の断面で川側と山側の傾斜角が微妙に異なっているのはそのためではなかろうか。

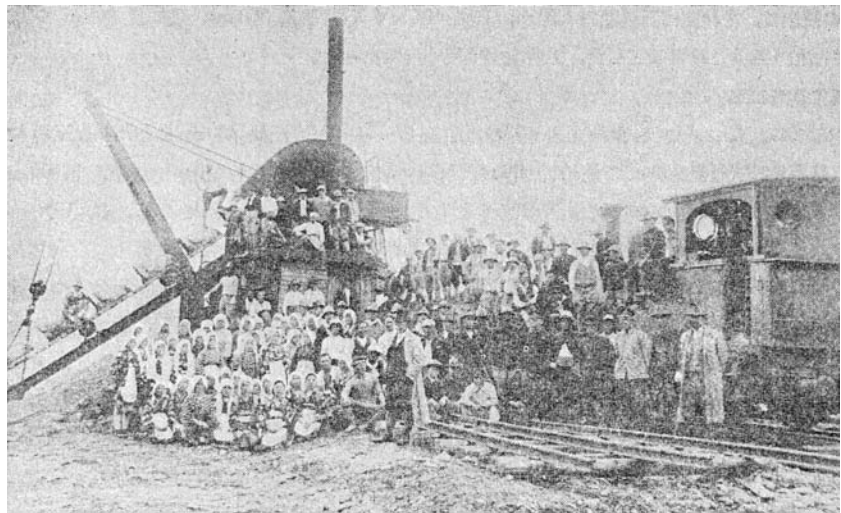


Fig.30 ラダエクスカベーター(『渡川改修四十年史』1970より)

5. おわりに

今回の調査は, 試掘調査の予測とは異なる結果となった。文書に記載されない事柄は半世紀過ぎるとほとんど忘れ去られてしまうものであろうか。昭和初めの掘削工事の記録は先の『渡川改修四十年史』のみとわずかに残る当時の証言である。その事実は中村市史の中では忘れ去られ, 遺跡台帳にも触れられてはいなかった。

そして, 発掘調査によって検出されたのは不自然な畝状地形とその間にみられた耕作跡およびわずかな出土遺物であった。しかし, 出土遺物の中に近代の陶磁器に混じり石炭片と枕木止めの釘があり, 掘削工事によって生じた痕跡であることの実証を得ることができた。また, 地質学と自然

科学分析により耕作物の特定までには至らなかったが、耕作期間についての示唆を得ることができた。

最後に、ご多忙な大阪自然史博物館の那須孝悌館長には、埋蔵文化財センターの職員研修の講師をお願いした際に中村までご同行願ひ、貴重なご教示を賜った上に玉稿を頂いた。心より謝意の意を表したい。また、パリノ・サーヴェイ株式会社の辻本裕也氏を始め関係各位からご教示とご協力を得ることができた。末筆ながら記して心から深甚の謝意を表したい。

註

- (1) 戦前、戦中そして戦後の昭和20年代初めまで、夏場はサトウキビとサツマイモ、冬場は麦を畝間で栽培し、毎年少なくとも2回は冠水し、サツマイモが全滅する被害が出た年もあったが、サトウキビについては草丈が高いので、洪水の被害には遭わなかったとのことである。また、サトウキビの代わりに桑を植えていた部分も一部にあったとのことである。
- (2) 長宗我部地検帳には「津崎ヨリ筆ヲ始」、「津崎」、「津崎村」など、船着場を意味する「津」がみられる。
- (3) 今回報告した試掘調査以外に、本年度築堤工事に併行して行われる県道山路中村線改良工事に伴う試掘調査を南北約700mに亘って実施した結果、集落跡は確認できなかったものの、洪水で埋もれた鋤跡の残る耕作面など水田跡とみられる土層が複数確認された。しかし、時期を特定するに足る遺物の出土はなく、土色が灰色を基調としていることから近世以降のものと考えられる。
- (4) 今回の調査で出土した8世紀末～9世紀初めとみられる土師器の杯蓋(20)が包含されていた土層より上層については、工事による影響を受けているとみられることからその上限は9世紀代と考えられる。
- (5) 不破の対岸の具同での水位記録があり、不破もほぼ同じ水位であったものと考えられ、5mの水位上昇があれば、Ⅱ区、Ⅲ区とも冠水したものと判断される。

引用・参考文献

- 建設省四国地方建設局中村工事事務所 1970『渡川改修四十年史』 社団法人四国建設弘済会
山本 大ほか 1986『角川日本地名大辞典 39高知県』 角川書店
廣田佳久 1986「Loc.23・37」(遺構)・「Loc.39」『田村遺跡群』第3分冊 高知県教育委員会

圖 版



調査前風景(西より)



調査前風景(東より)



I区確認トレンチ完掘状態(南より)



I区確認トレンチ北壁セクション(南より)



Ⅱ区畝状遺構検出状態(南東より)



Ⅱ区遺構完掘状態(南東より)



Ⅱ区遺構完掘状態(南東上空より)



Ⅱ区遺構完掘状態(北東上空より)



Ⅱ区北壁セクション1(南より)



Ⅱ区北壁セクション2(南より)



Ⅱ区北壁セクション3(南より)



Ⅱ区北壁セクション4(南より)



Ⅱ区北壁セクション5(南より)



Ⅱ区北壁セクション6(南より)



Ⅱ区北壁セクション7(南より)



Ⅱ区畝間11 近代陶器(8) 出土状態(西より)



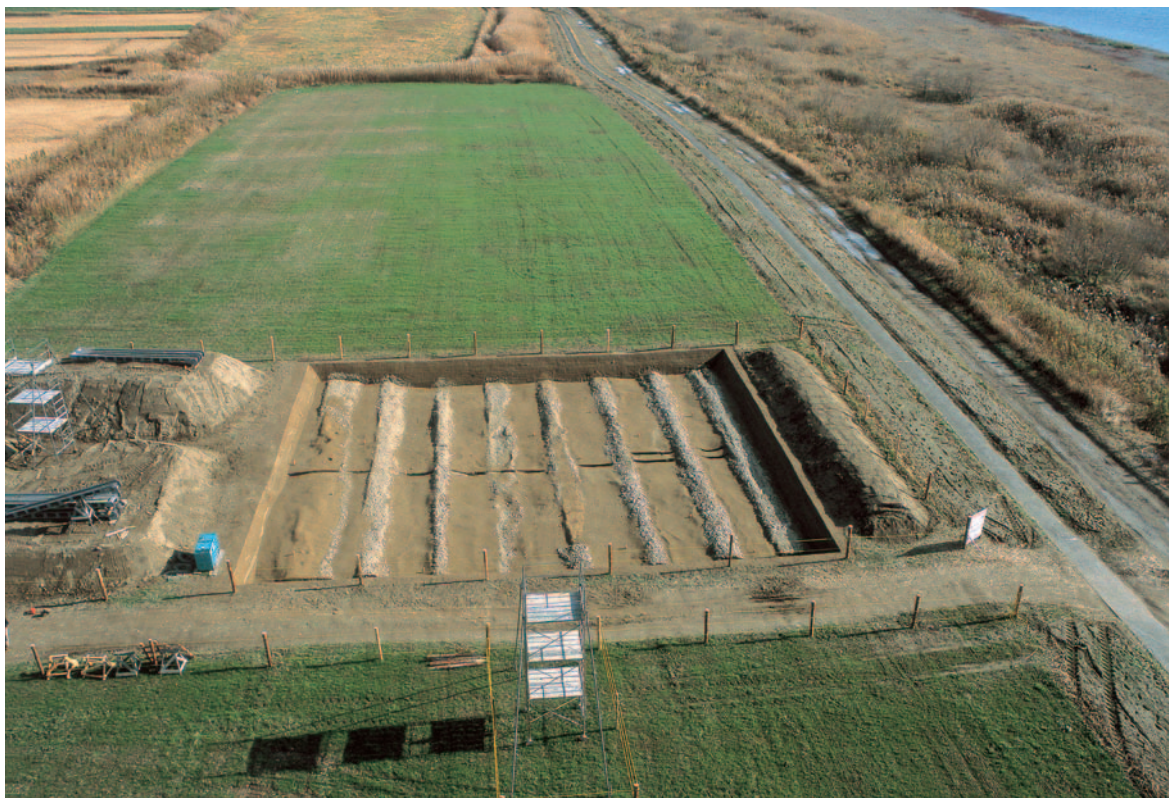
Ⅲ区畝状遺構検出状態(北西より)



Ⅲ区畝状遺構検出状態(北東より)



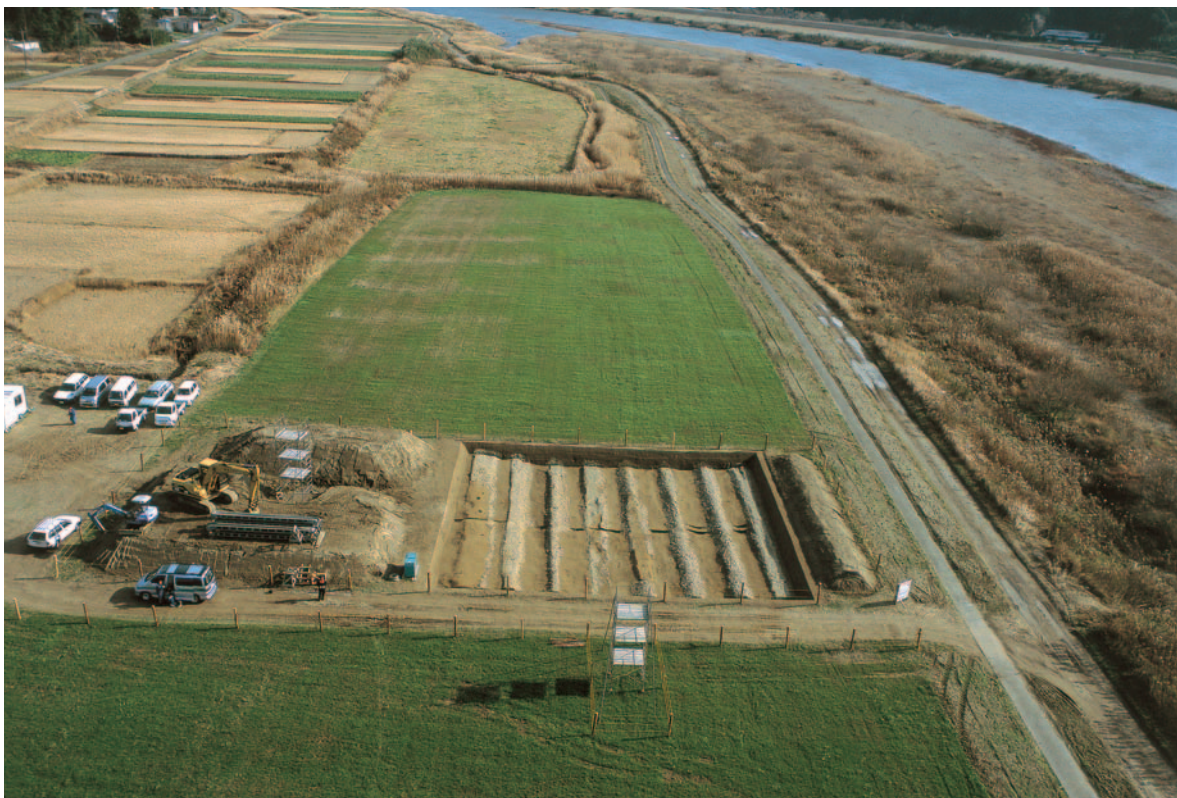
Ⅲ区第1次耕作面完掘状態(北西より)



Ⅲ区第1次耕作面完掘状態(北西上空より)



Ⅲ区第2次耕作面完掘状態(北西より)



Ⅲ区第2次耕作面完掘状態(北西上空より)



Ⅲ区第3次耕作面完掘状態(北西より)



Ⅲ区第3次耕作面完掘状態(南東上空より)



Ⅲ区北壁セクション1(南東より)



Ⅲ区北壁セクション2(南東より)

PL.14



Ⅲ区北壁セクション3(南東より)



Ⅲ区北壁セクション4(南東より)



Ⅲ区北壁セクション5(南東より)



Ⅲ区畝間5(南東より)



Ⅲ区畝間6(南東より)



Ⅲ区畝間2土製品(23)出土状態(東より)



土師質土器(羽釜)



土師質土器(羽釜)



土製品(土錘)



ガラス製品(小瓶)



木製品(下駄)表



木製品(下駄)裏



14

近代陶器(蓋)



20

土師器(杯蓋)



21

近世磁器(紅皿)



23

土製品(土錘)



22

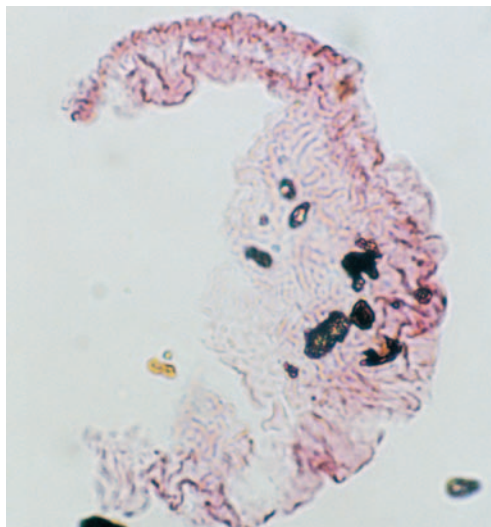
近代磁器(碗)



22

近代磁器(碗)底部

自然科学分析



1. ツガ属



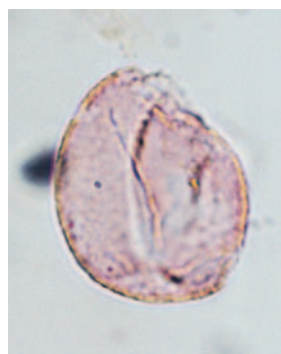
2. スギ



3. ハンノキ属



4. クリ



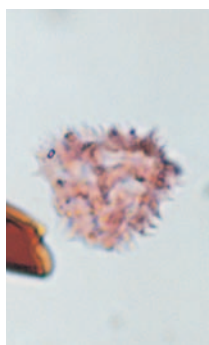
5. コナラ属コナラ亜属



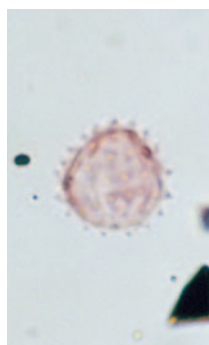
6. イネ科



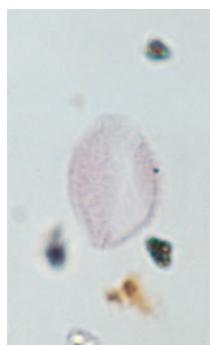
7. アブラナ科



8. タンポポ亜科



9. キク亜科



10. ヨモギ属



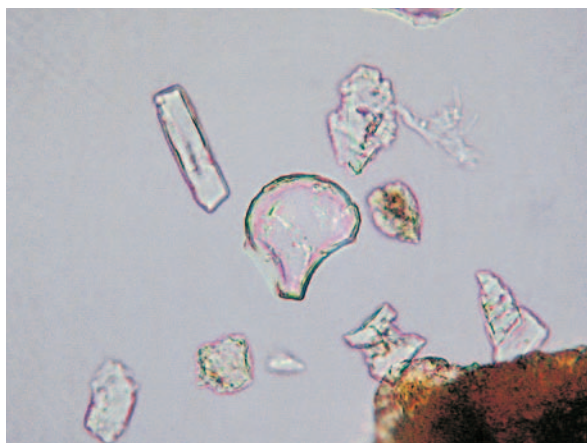
11. シダ植物単条溝胞子



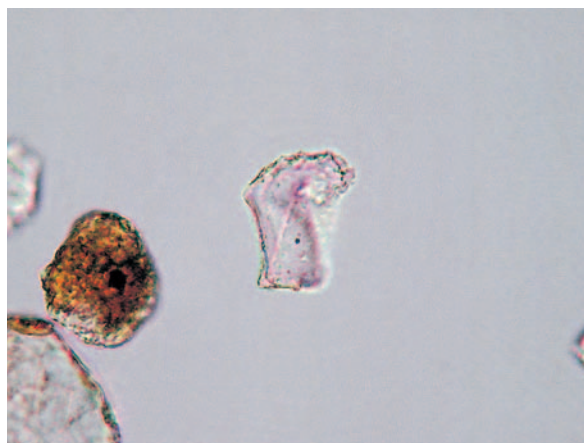
12. シダ植物三条溝胞子

— 10 μ m

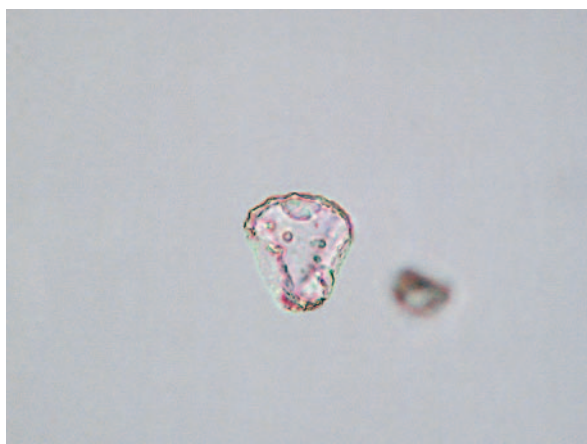
不破遺跡の花粉・胞子



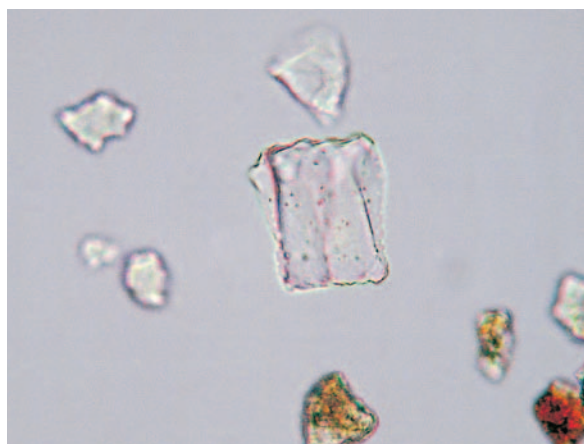
イネ



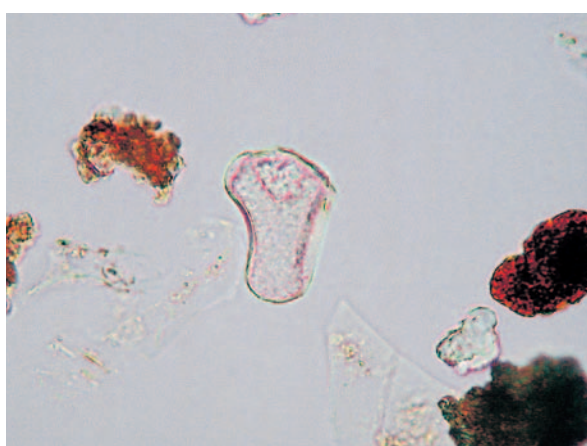
ネザサ節型



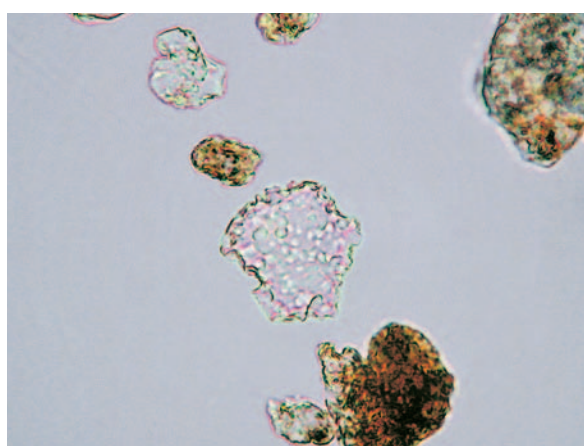
ネザサ節型



ネザサ節型

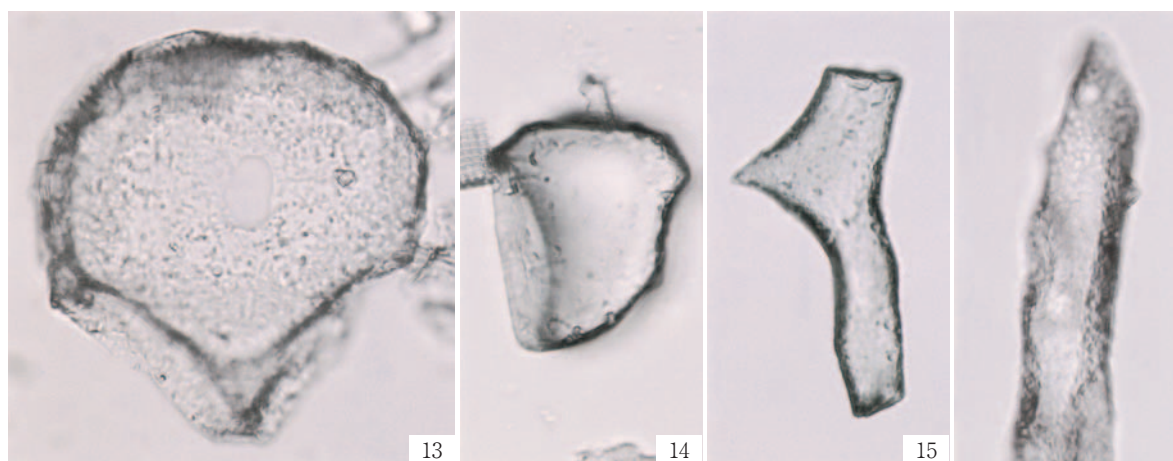
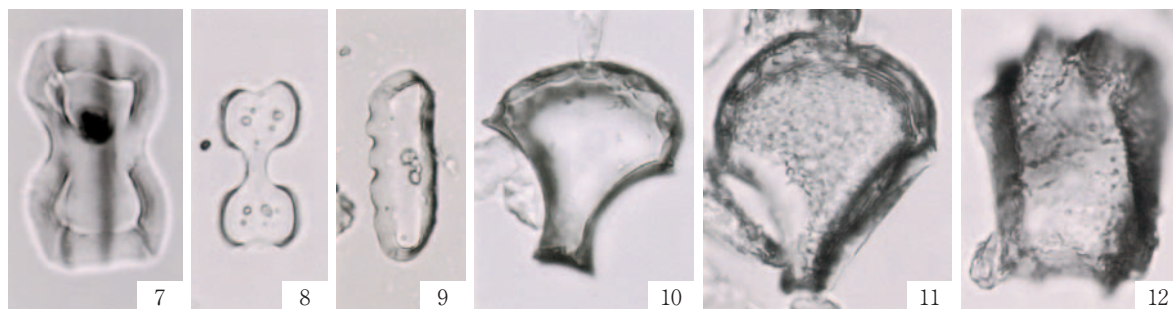
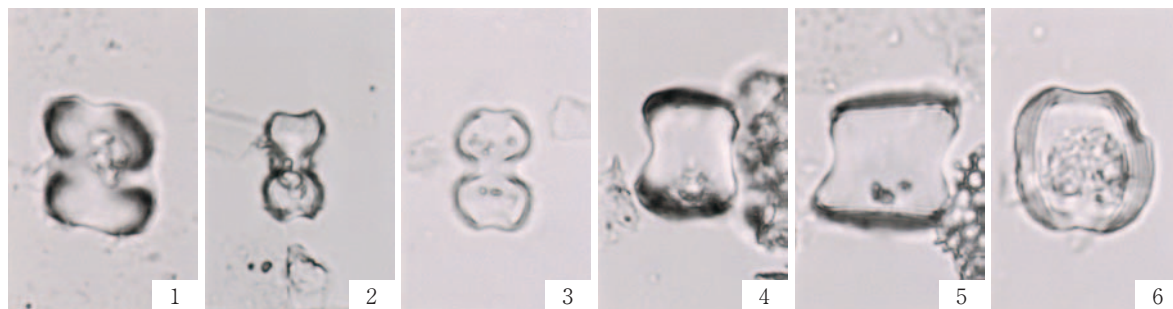


ススキ属型



不明

— 50 μ m



50 μ m

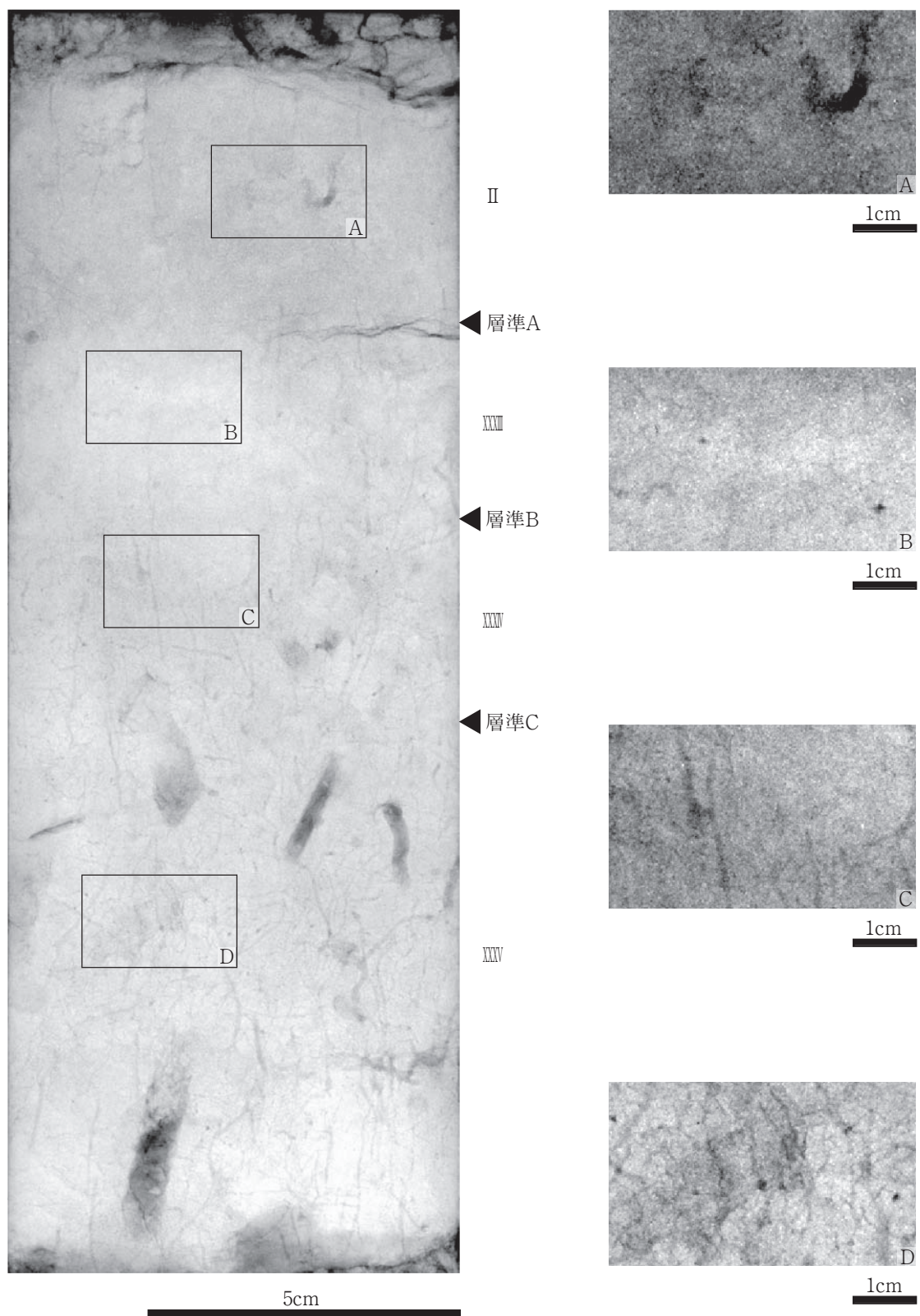
(1 ~ 8)

50 μ m

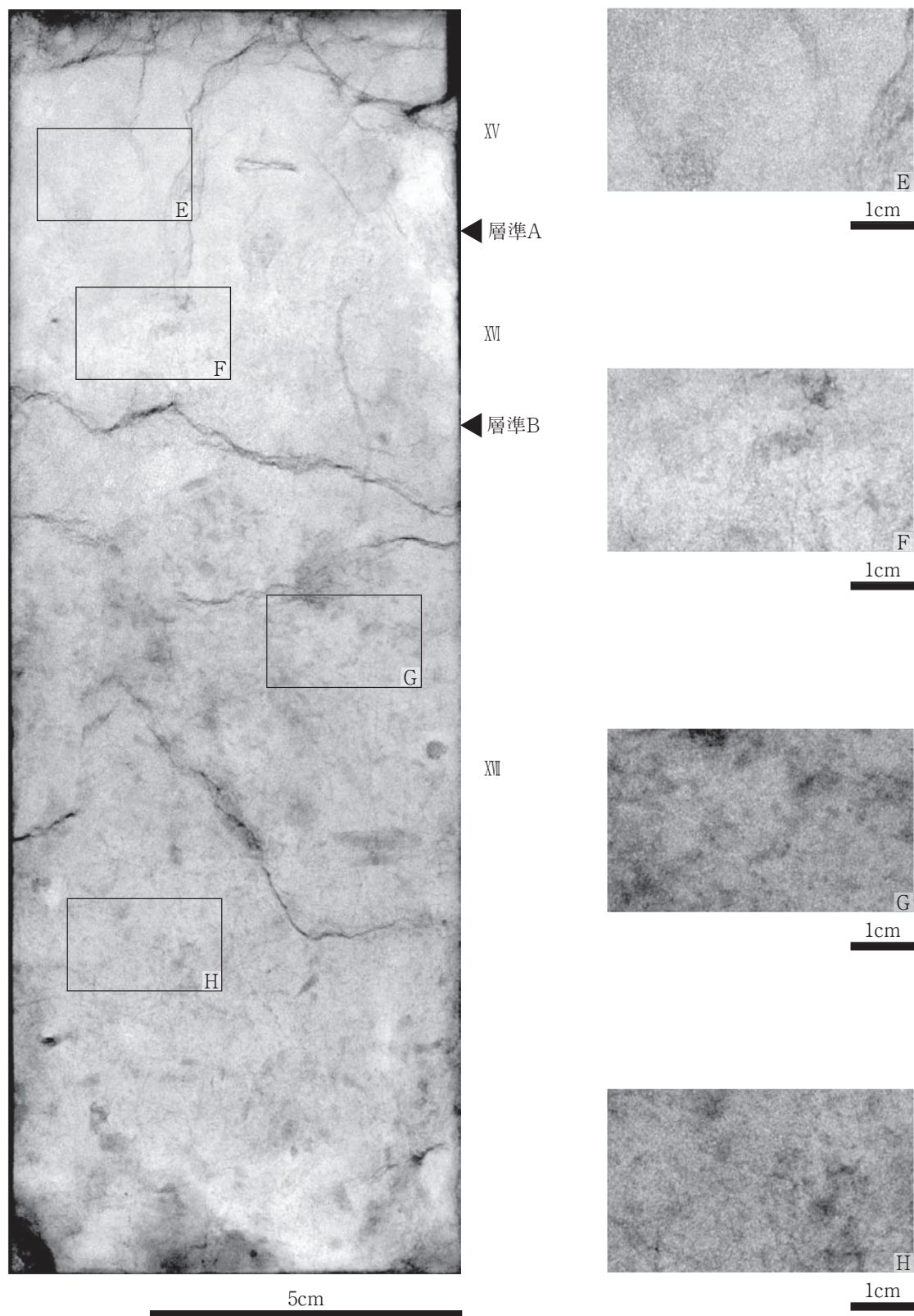
(9 ~ 16)

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (1 地点: 1) | 2. イネ属短細胞珪酸体 (2 地点: 1) |
| 3. イネ属短細胞珪酸体 (2 地点: 3) | 4. ネザサ節短細胞珪酸体 (2 地点: 1) |
| 5. ネザサ節短細胞珪酸体 (2 地点: 3) | 6. ヨシ属短細胞珪酸体 (2 地点: 1) |
| 7. コブナグサ属短細胞珪酸体 (1 地点: 1) | 8. ススキ属短細胞珪酸体 (2 地点: 1) |
| 9. オオムギ族短細胞珪酸体 (1 地点: 1) | 10. イネ属機動細胞珪酸体 (2 地点: 1) |
| 11. イネ属機動細胞珪酸体 (2 地点: 3) | 12. ネザサ節機動細胞珪酸体 (2 地点: 1) |
| 13. ヨシ属機動細胞珪酸体 (2 地点: 1) | 14. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (2 地点: 1) |
| 15. 樹木起源第(念)グループ (2 地点: 2) | 16. 樹木起源第(協)グループ (2 地点: 3) |

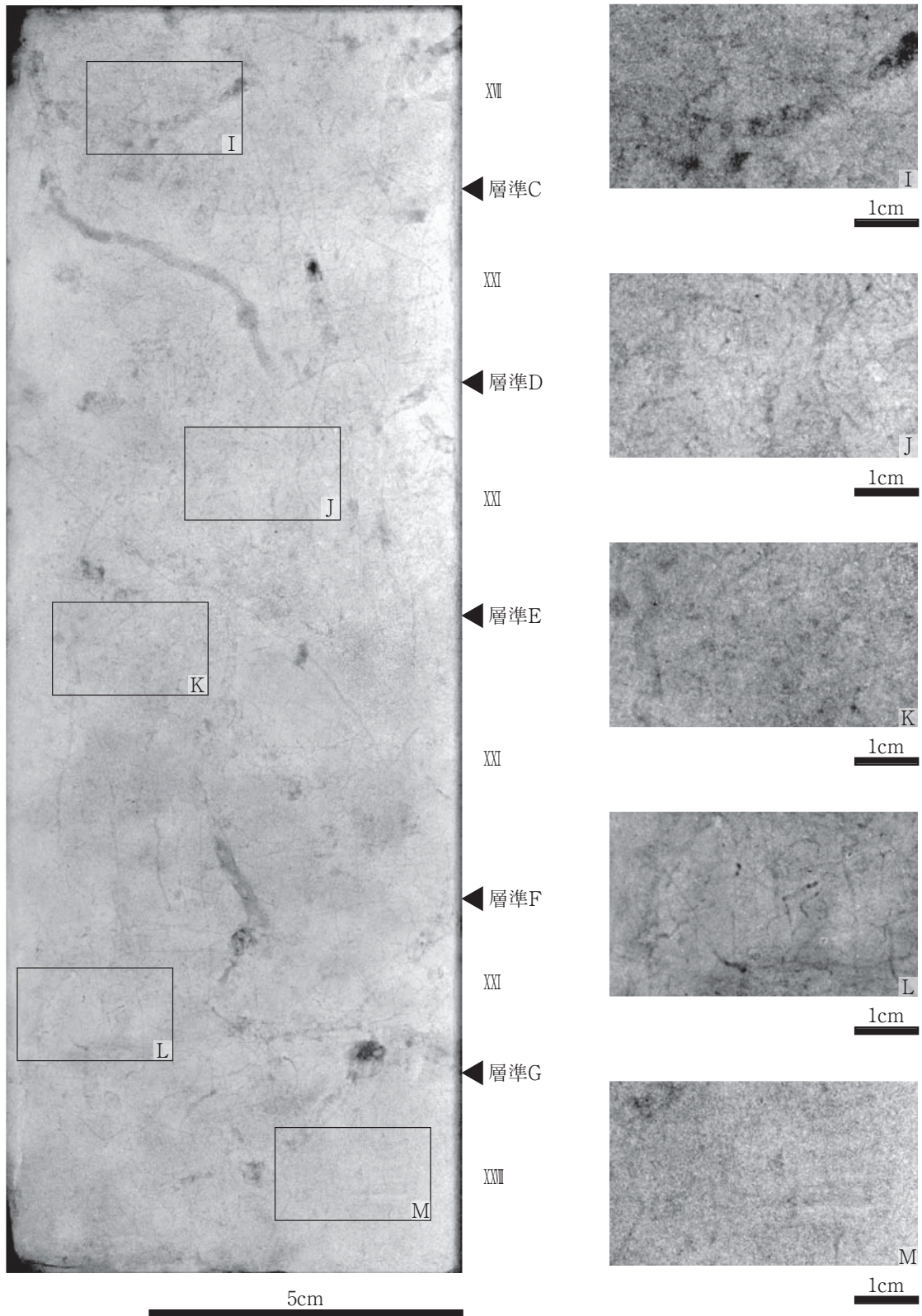
植物珪酸体



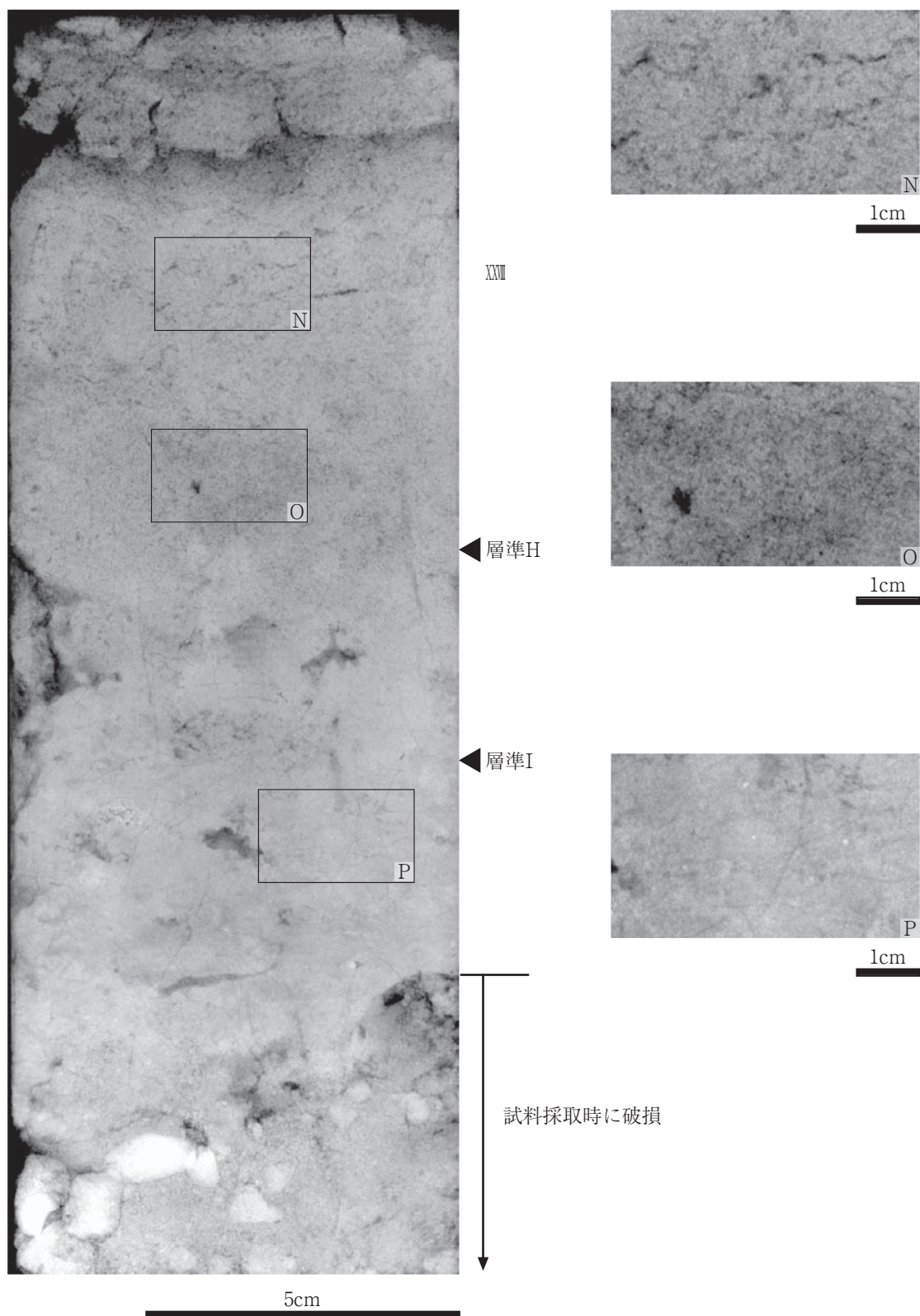
軟 X 線写真(1)



軟 X 線写真(2)



軟 X 線写真(3)



軟 X 線写真(4)

報告書抄録

ふりがな	ふばいせき							
書名	不破遺跡							
副書名	中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XIII							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第90集							
編著者名	廣田佳久, 中山真司, 下村裕, 那須孝悌, 古環境研究所, パリノ・サーヴェイ							
編集機関	財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2004年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふばいせき 不破遺跡	こうちけん 高知県 なかむらし 中村市 ふば 不破	39207	70001	32° 58' 42"	132° 56' 19"	20021015) 20030115	2,646m ²	中村宿毛 道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
不破遺跡	生産遺跡	近代	耕作面	土師器 近代陶磁器 木製品 ガラス製品	昭和8年以降に行われた土砂採取工事によって生じた畝状遺構の間を利用しての耕作の痕跡を確認した。			

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第90集

不 破 遺 跡

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ

2004年3月26日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
Tel. 088-864-0671
印刷 共和印刷株式会社